



JAPAN PRIZE

日本国際賞 2025

———— SINCE 1985 ————

公益財団法人 国際科学技術財団

C O N T E N T S

JAPAN PRIZE：人類の平和と繁栄のために

-2-

JAPAN PRIZE：知慮としての科学技術を

-3-

財団概要

-4-

財団の事業

-6-

JAPAN PRIZE

-8-

推薦と審査

分野検討委員会・審査委員会

2026 JAPAN PRIZE授賞対象分野

今後の予定

JAPAN PRIZE受賞者

-11-

2025年 平成記念研究助成

-53-

当財団へのご寄付について

JAPAN PRIZE：人類の平和と繁栄のために



会長 小宮山 宏

地球は宇宙に浮かぶ無数の星のひとつである。その小さな星が生まれてから45億年の時が経過し、直近の一瞬ともいふべき数百万年前に私たちの祖先が誕生した。以来人類は種としての繁栄を続け、文明を発展させてきた。人のくらしも豊かになっていったが、その歩みは極めて緩慢であった。ところが今から二百年ほど前に産業革命が起こり、状況が一変した。特に20世紀に入って以降、発展の歩みは著しく加速し、人々のくらしは豊かさを増した。その発展をけん引したのは科学技術である。

例えば、人は長生きになった。実はその歴史の中で、ほぼすべての人々は短命であったのだ。20世紀初頭に入っても人の平均寿命は31歳、それが現在すでに72歳に達している。積年の夢であった長寿を実現したのだから、文明は成功しているといってよいだろう。

Japan Prize（日本国際賞）は、人類の平和と繁栄に貢献する科学技術の成果を表彰するために創設された。これまでの授賞の歴史をたどるとき、私たちが現在享受するくらしの豊かさ、その実現に果たした科学技術の役割を実感することができる。今後ともその意義を確信し、事業の継続を図る所存である。

一方で、地球とそこに生きる人の未来に不安が生じていることを否定しえない。私たちは、美しい地球を維持することができるだろうか。人類は、一人も取り残すことなしに、繁栄を続けることができるだろうか。それこそが今、私たちに課

せられた基本的な問いなのである。これからのJapan Prizeが、こうした問いに答えるものになるであろうことを確信している。

科学の発展は膨大な知の蓄積をもたらした。知が人類のかけがえのない財産であることは言を俟たないが、あまりの膨大さゆえに、知の全体像を把握することが困難になっている。このことが、豊かさを増した社会の複雑化、豊かさの代償としての地球の変化とあいまって、私たちの行く末に不安をもたらしている。つまり、科学の発展そのものが未来への不安の源泉なのだから、科学者はこの問題に正面から対峙すべきである。様々な課題の解決に向けて、細分化した知の分野を超えて取り組まなければならないだろう。科学技術が悪しく用いられる可能性を否定しえないとしても、それを解決する知はありうると私たちは確信する。

文明と科学技術の行く末に思いを馳せつつ、1985年の第1回授賞式以来、本賞に対し格別のご厚情を賜った上皇上皇后両陛下に心からの謝意を表するために、2019年、「平成記念研究助成制度」を創設した。意欲ある研究者にチャレンジを促す一助となれば幸いである。

今後とも当財団は、顕彰や助成、啓発を通じて、人類の平和と繁栄に貢献していきたい。

JAPAN PRIZE：知慮としての科学技術を



理事長 永井 良三

人は生まれながらに知ることを欲する。人間の好奇心から科学が誕生し、人類の知的基盤となった。科学は技術に応用されることにより社会を変革し、技術の発展は科学を深化させてきた。科学と技術は相まって人類の知を拡大し、近代的自我と近代社会を形成した。しかし科学技術は戦争の手段ともなり、さらに地球環境を悪化させるなど、生命の存続と人間の営みを危うくしつつある。最近ではAIの発展もめざましい。AIはさまざまな領域の科学研究や技術開発に活用されているが、誤った情報も容易に生みだす。これが拡散すると真実の判断は困難となる。

この状況において、我々は科学技術の成果を謳歌するだけではなく、その二面性にも眼を向ける必要がある。科学技術の果実を享受するときに、果実を摘むことに伴う危うさ、すなわち人類と社会のあり方、人々の生き方に及ぼす影響に思いを巡らさなければならない。

しかし科学技術がいかに多くの課題を抱えているとしても、科学技術への期待は大きい。もとより知への欲求はとどまることはなく、為すべき課題に限りはない。科学技術が生み出す課題を解決するのも科学技術であり、わが国は科学技術を通して国際社会への貢献が強く求められている。

Japan Prize（日本国際賞）は、科学技術の進歩のための研究開発活動を奨励し、科学技術に関する知識及び思想の総合的な普及啓発を図ることを目的として、1983年に閣議了

解を得て発足した。独創的で飛躍的な成果を挙げ、人類の平和と繁栄に著しく貢献したと認められる世界の研究者に贈られる。毎年4月に開催される授賞式には、天皇皇后両陛下のご臨席を賜り、各界を代表する方々のご出席を仰いできた。現在のJapan Prizeはこうした多くの方々のご理解とご支援の賜物である。本賞はとくに社会への貢献を重視していることが特徴である。ここには賞の創設に関わられた初代松下幸之助会長をはじめとする多くの人々の思いが込められている。

地球規模の変動の時代にあって、人類の道標となるべき知慮としての科学技術がいま求められている。科学技術は正しく育てれば、常にその枝に豊かな実を結ぶ樹に喩えられる。我々は科学の樹のこの精神を次世代に守り伝えなければならない。そのため若手研究者の育成は本財団にとって大きな課題である。そこで2019年に、本賞に対し格別のご厚情を賜った上皇皇后両陛下に謝意を表し、「平成記念研究助成制度」を創設した。若手の自立と発展を支援する助成となれば幸いである。

国際科学技術財団は、知慮となる科学技術を育てる土壌としての役割を担っている。これにより人類の平和と繁栄に貢献する所存である。

名称

公益財団法人 国際科学技術財団

目的

この法人は、人類の平和と繁栄が世界中の人々にとって共通の願望であることに鑑み、これに貢献する科学技術の進歩のための研究開発活動を奨励すると共に、科学技術に関する知識及び思想の総合的な普及啓発を図ることを目的とする。

事業

この法人は、上記の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 科学技術において、独創的、飛躍的な成果を挙げ、その進歩に大きく寄与し、人類の平和と繁栄に著しく貢献する業績を成したと認められる人をJapan Prize（日本国際賞）をもって顕彰する事業
- (2) 科学技術に関する研究に対する助成及び奨励事業
- (3) 広報刊行物、研究論文集等の刊行物やセミナー開催などを通じての科学技術に関する知識及び思想の総合的な普及啓発活動
- (4) その他この法人の目的を達成するために必要な事業

沿革

- 1982年 日本国際賞準備財団発足
- 1983年 閣議了解
- 1985年 第1回日本国際賞授賞式を開催
- 1989年 やさしい科学技術セミナーを開始
- 2006年 研究助成事業を開始
- 2010年 公益財団法人としての認定を受け、「公益財団法人 国際科学技術財団（英文名称：The Japan Prize Foundation）」として設立登記
- 2020年 平成記念研究助成事業を開始（研究助成事業の改編）

閣議了解

日本国際賞の創設について

財団法人国際科学技術財団が授与する日本国際賞が、人類の平和と繁栄のために科学技術が果たす役割についての認識を深め、広く人類の発展に寄与しようとするものであることにかんがみ、その実施に関し、関係行政機関は必要な協力を行うものとする。
(1983年10月28日)



理事・監事及び評議員

会長・理事・監事

会長	小宮山 宏 株式会社 三菱総合研究所 理事長 東京大学 第 28 代総長
理事長※	永井 良三 自治医科大学 学長 東京大学名誉教授 (元 東京大学 医学部附属病院長)
専務理事	北尾 充 (常勤) 公益財団法人 国際科学技術財団 事務局長
理事	安藤 昌弘 元 内閣府迎賓館 館長 川合 眞紀 大学共同利用機関法人 自然科学研究機構 理事長 国立研究開発法人 科学技術振興機構 研究開発戦略センター センター長 東京大学名誉教授 小林 秀明 帝京大学 冲永総合研究所 名誉教授 (元 宮内庁 東宮侍従長、元 駐タイ王国大使) 松下 正幸 パナソニック ホールディングス 株式会社 特別顧問 森口 泰孝 公益財団法人 科学技術広報財団 理事長 (元 文部科学事務次官)
監事	尾崎 裕 大阪ガス 株式会社 相談役 久保田 政一 一般社団法人 日本経済団体連合会 副会長・事務総長

※ 代表理事

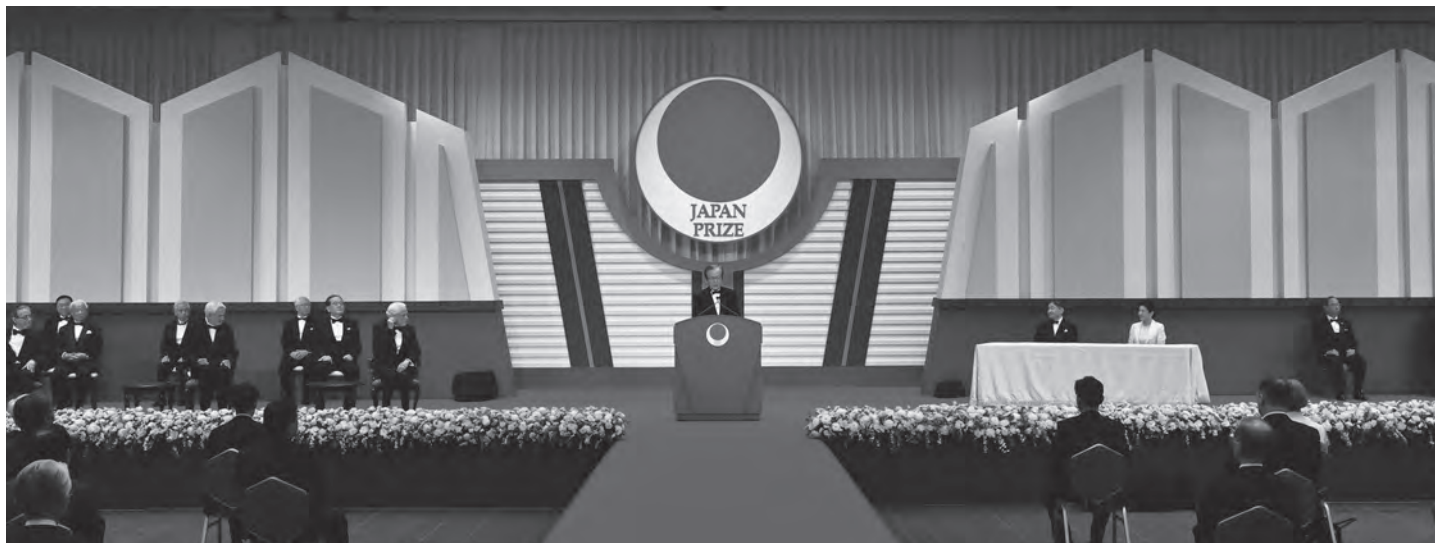
評議員

評議員会 議長	奥 正之 株式会社 三井住友フィナンシャルグループ 名誉顧問
評議員会 副議長	伏屋 和彦 元 会計検査院長
評議員	安西 祐一郎 一般財団法人 交詢社 理事長 独立行政法人 日本学術振興会 顧問 (元 慶應義塾長) 内永 ゆか子 株式会社 グローバリゼーション リサーチ インスティテュート 代表取締役社長 特定非営利活動法人 ジャパン・ウィメンズ・ イノベティブ・ネットワーク ファウンダー名誉会長 (元 日本アイ・ピー・エム株式会社 取締役専務執行役員) 小田野 展丈 宮内庁 侍従職御用掛 河村 潤子 国立教育政策研究所 名誉所員 (元 国立教育政策研究所 所長) 津賀 一宏 パナソニック ホールディングス 株式会社 取締役会長 友野 宏 日本製鉄 株式会社 社友 中山 譲治 第一三共 株式会社 常勤顧問 濱口 道成 国立研究開発法人 日本医療研究開発機構 先進的研究開発戦略センター センター長 国立研究開発法人 科学技術振興機構 顧問 (元 名古屋大学 総長) 山極 壽一 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所 所長 (前 京都大学 総長、元 日本学術会議 会長)

特別顧問

矢崎 義雄 学校法人 東京医科大学 理事長 (元 独立行政法人国立病院機構 理事長、元 国立国際医療センター 総長)
吉川 弘之 元 東京大学総長

(役職は 2025 年 4 月 1 日現在、敬称略、五十音順)



JAPAN PRIZE（日本国際賞）

Japan Prize（日本国際賞）は1981年、「世界の科学技術の発展に資するため、国際的に権威のある賞を設けたい」との政府の構想に民間からの寄付を基に設立され、1983年に閣議了解を得て実現しました。この賞は、全世界の科学技術者を対象とし、独創的で、飛躍的な成果を挙げ、その進歩に大きく寄与し、もって人類の平和と繁栄に著しく貢献したと認められる人に贈られます。

授賞対象分野は科学技術の全分野を対象とし、科学技術の動向等を勘案して毎年二つの分野を指定します。原則として各分野1件に対して授与され、受賞者には賞状、賞牌に加えて副賞として1億円（各分野）が贈られます。

授賞式には天皇皇后両陛下が毎回ご臨席、三権の長を始め関係大臣と各界の代表のご出席を得、挙行されます。



JAPAN PRIZE

日本国際賞のロゴマークは、亀倉雄策氏（日本グラフィックデザイナー協会初代会長）のデザインによるもので、亀倉氏は次のように述べています。

「日本国際賞のデザインは太陽をイメージして考えました。太陽はエネルギーの源、また円は完全、真理ということを連想させ科学に対する賞に相応しいイメージです。」



平成記念研究助成

現在、世界的に見て、これまでに遭遇したことのない、様々な新しい社会的課題が出現しています。それらの課題の解決には、単一の専門領域からの提案だけでは不十分ですが、各分野の細分化が進み過ぎ、専門領域を超えた知識の集約を困難にする状況が生まれていることを憂慮します。現代の諸課題の解決には、多様な分野の人々が課題を多角的に検討し、自由な発想のアイデアを出し合い、力を合わせて知の連結を成し遂げていかねばなりません。そのような風土の醸成を促進していくために、若手研究者自らが、これからの目指したい世界を思い描き、解決したい課題を提示するとともに、人文・社会系、理工学系を問わず、各々の知見を持ち寄って、協働して解決に取り組む試みが非常に重要だと考えます。そのような挑戦の中から、次世代を拓く新しい学問分野が生まれてくることを期待します。

「平成記念研究助成」では、今後目指すべき世界を実現するために、短期間の解決に至らずとも先端的で社会的にインパクトのある研究提案と、様々な研究分野の専門家をコーディネートできる若手人材の発掘に努めます。

平成記念研究助成は、本賞に格別のご厚情を賜った上皇上皇后両陛下に心からの謝意を表するために創設されました。



やさしい科学技術セミナー

私たちの生活に関わりのある、様々な分野の科学技術について、研究助成に選ばれた研究者を講師に迎え、やさしく解説していただきます。講義だけでなく実験や研究室の見学などを交えることで、より理解しやすく科学への興味をかきたてる内容にしています。

1989年以降、これまでに300回以上開催しています。

推薦と審査

2025年受賞者の決定プロセス



- 国際科学技術財団内に設けられた「分野検討委員会」が、翌々年の日本国際賞の授賞対象となる2分野を決定し、毎年11月に発表します。同時に財団に登録された世界約15,500人以上の推薦人にWEB 推薦システムを通じて受賞候補者の推薦を求めています。推薦受付は翌年1月末に締め切られます。
 - 各分野毎に科学技術面での卓越性を専門的に審査する「審査部会」で厳選された候補者は「審査委員会」に答申され、そこで社会への貢献度なども含めた総合的な審査が行われ、受賞候補者が推挙されます。
 - 「審査委員会」からの推挙を受け、毎年11月の財団理事会で受賞者の最終決定が行われます。
 - 翌年1月には当該年度の受賞者発表を行い、毎年4月に授賞式を開催します。
- このようにJapan Prizeは、授賞対象分野検討開始から授賞式での贈賞まで、約2年をかけた慎重、丁寧なプロセスで運営されています。

分野検討委員会・審査委員会

2026 Japan Prize分野検討委員会委員

委員長

宮園 浩平

国立研究開発法人理化学研究所 理事
東京大学大学院医学系研究科応用病理学 卓越教授

副委員長

橋本 和仁

国立研究開発法人科学技術振興機構 理事長

委員

新井 洋由

東京大学名誉教授
帝京大学薬学部 教授
東京大学大学院医学系研究科 客員研究員

五十嵐 仁一

元ENEOS総研株式会社 代表取締役社長
元JXTGエネルギー 取締役常務執行役員

上田 修功

国立研究開発法人理化学研究所
革新知能統合研究センター 副センター長
NTTコミュニケーション科学基礎研究所
リサーチプロフェッサー(客員フェロー)

沖 大幹

東京大学大学院工学系研究科 教授

倉永 英里奈

東北大学大学院生命科学系研究科 教授
京都大学大学院薬学研究科 教授

黒田 忠広

東京大学特別教授室 特別教授
熊本県立大学 理事長

堤 伸浩

東京大学 副学長
東京大学大学院農学生命科学研究科
教授

仲野 徹

大阪大学名誉教授

波多野 睦子

東京科学大学 理事・副学長
東京科学大学工学院 教授

宝野 和博

国立研究開発法人物質・材料研究機構 理事長

元村 有希子

同志社大学生命医科学部 特別客員教授

吉田 稔

国立研究開発法人理化学研究所 理事
東京大学特別教授室 特別教授
東京大学名誉教授

(役職は2024年11月授賞対象分野発表時、敬称略、五十音順)

2025 Japan Prize審査委員会委員

委員長

五神 真

国立研究開発法人理化学研究所 理事長
前東京大学総長

副委員長

間野 博行

国立研究開発法人国立がん研究センター 研究所長

委員

大久保 達也

東京大学 総長特別参与
東京大学大学院工学系研究科 教授

岡野 栄之

慶應義塾大学 教授
慶應義塾大学再生医療リサーチセンター
センター長

川上 則雄

国立研究開発法人理化学研究所
最先端研究プラットフォーム連携(TRIP)事業本部
基礎量子科学研究プログラム 副プログラムディレクター
京都大学名誉教授

永田 恭介

筑波大学 学長

長谷川 真理子

独立行政法人日本芸術文化振興会 理事長
総合研究大学院大学名誉教授

松下 正幸

公益財団法人国際科学技術財団 理事

森口 泰孝

公益財団法人国際科学技術財団 理事
公益財団法人科学技術広報財団 理事長

安浦 寛人

大学共同利用機関法人情報・システム研究機構
国立情報学研究所 副所長
九州大学名誉教授

「物質・材料、生産」分野分野

部会長

川上 則雄

国立研究開発法人理化学研究所
最先端研究プラットフォーム連携(TRIP)事業本部
基礎量子科学研究プログラム 副プログラムディレクター
京都大学名誉教授

部会長代理

幾原 雄一

東京大学 特別研究教授

委員

石谷 治

広島大学大学院先進理工系科学研究科 特任教授
東京工業大学名誉教授

小口 多美夫

大阪大学大学院基礎工学研究科 特任教授

加藤 昌子

関西学院大学生命環境学部 教授

金光 義彦

京都大学化学研究所 特任教授
京都大学名誉教授

菊池 昇

株式会社トヨタコンボン研究所 代表取締役所長

小林 研介

東京大学大学院理学系研究科 教授

塩谷 光彦

東京理科大学研究推進機構総合研究院 教授
東京大学名誉教授

島川 祐一

京都大学化学研究所 所長・教授

瀧川 仁

東京大学名誉教授

野崎 京子

東京大学大学院工学系研究科 教授

浜地 格

京都大学大学院工学研究科 教授

安田 秀幸

京都大学大学院工学研究科 教授

専門委員

近藤 哲男

東京農工大学農学府・農学部 寄附講座・教授

古川 英光

山形大学大学院理工学研究科 教授

「生物生産、生態・環境」分野分野

部会長

長谷川 真理子

独立行政法人日本芸術文化振興会 理事長
総合研究大学院大学名誉教授

部会長代理

巖佐 庸

九州大学名誉教授

委員

上 真一

広島大学名誉教授

河田 雅圭

東北大学教養教育院 総長特命教授

熊谷 日登美

日本大学生物資源科学部食品開発学科 教授

澁澤 栄

東京農工大学卓越リーダー養成機構 特任教授

嶋田 透

学習院大学理学部 学部長・教授
東京大学名誉教授

嶋田 正和

東京大学名誉教授

東樹 宏和

京都大学大学院生命科学系研究科 教授

中丸 麻由子

東京科学大学環境・社会理工学院 教授

花輪 公雄

東北大学名誉教授

茂木 一孝

麻布大学獣医学部動物応用科学科 教授

鷺谷 いづみ

東京大学名誉教授

専門委員

三枝 信子

国立環境研究所地球システム領域 領域長

清水 浩

大阪大学大学院情報科学研究科 教授

田中 佑

岡山大学環境生命自然科学学域 准教授

中野 雄司

京都大学大学院生命科学系研究科 教授

福田 真嗣

慶應義塾大学先端生命科学研究所 特任教授

(役職は2025年1月受賞者発表時、敬称略、五十音順)

2026 JAPAN PRIZE授賞対象分野

「物理、化学、情報、工学」領域

「エレクトロニクス、情報、通信」分野

背景、選択理由

エレクトロニクス、情報、通信分野の技術は、コンピュータやスマートフォンの爆発的な普及、インターネットの急成長、そして半導体技術の飛躍的な進歩を通じて、情報処理やコミュニケーションの効率化を加速させ、生産性と生活の質を劇的に向上させました。また、物理、化学、生命科学等の研究においても、データ解析やシミュレーション技術の急激な進展により、実験精度の向上や新たな発見が次々と促進され、科学技術の発展に大きく寄与しています。これらの技術は現代社会の不可欠な基盤として急速に重要性を増しており、今後も、AIや量子コンピューティング、5G通信、量子通信技術の進展が産業の自動化や高度なデータ処理をさらに推進し、IoTを活用したスマートシティの飛躍的な発展に大きく寄与することが期待されています。

一方で、サイバー空間での悪用を防ぐセキュリティの強化は、急速に変化する情報社会において、安心で安全な環境の確立や持続可能な社会の実現、そして経済成長においてますます重要な役割を果たすでしょう。さらに、AIの急速な発展に伴い、エネルギー消費の問題や、倫理的課題等も同時に浮上しており、その対処が求められています。

対象とする業績

2026年の日本国際賞は「エレクトロニクス、情報、通信」分野において、科学技術の飛躍的発展をもたらし、新しい産業の創造や生産技術の革新、情報化社会の発展、社会の安全・安心の確保、生活の質向上に寄与した基盤技術やシステム開発、そして今後の社会のさらなる発展を促す可能性が極めて高い業績を広く対象とします。

今後の予定

授賞対象分野は基本的に3年の周期で循環します。
毎年、Japan Prize分野検討委員会から向こう3年間の授賞対象分野が発表されます。

「物理、化学、情報、工学」領域	
授賞対象年	授賞対象分野
2026年	エレクトロニクス、情報、通信
2027年	資源、エネルギー、環境、社会基盤
2028年	物質・材料、生産

「生命、農学、医学、薬学」領域

「生命科学」分野

背景、選択理由

ゲノムの解読以来、細菌からヒトに至るまで、生命の基本原則や生体機能の多様性に関する理解が大きく進展しました。生命を構成する分子の働きを基に、遺伝子発現やエピジェネティクスの制御、自律的に組織を作り出す発生・分化の仕組みが細胞レベルで解明されつつあります。個体レベルでは、神経系や免疫系、代謝系等が体内でどのように関連しているかが明らかになってきました。そして、分子を介して生物間で情報がどのようにやりとりされるかといった生態レベルでの相互作用についても理解が進んでいます。すなわち、モデル生物や自然界の生物の研究から、発生から老化に至るプロセスや、進化、共生、環境適応等のメカニズムが明らかになりつつあります。さらに、構造生物学、生物物理学、化学生物学、合成生物学の技術革新や、可視化技術、単一細胞解析技術、バイオビッグデータ解析等の進歩により、生命に関する理解はより一層深まってきています。これらの進展により、分子から細胞、組織、個体、集団（生態系）に至る多階層の中で、生命をシステムとして理解することが可能になりつつあります。生命倫理に配慮しながら、生命現象のメカニズムを解明することで、地球環境と人類の健康を両立させ、持続可能な社会の実現と人々の幸福に貢献することが期待されます。

対象とする業績

2026年の日本国際賞は「生命科学」の分野において、生命現象の新たな発見や制御機構の解明、あるいは生命機能のより深い理解を促進する技術革新などを通じて、科学技術に画期的進歩をもたらし、社会に大きく貢献する業績を対象とします。

「生命、農学、医学、薬学」領域	
授賞対象年	授賞対象分野
2026年	生命科学
2027年	医学、薬学
2028年	生物生産、生態・環境

2025 受賞者

「物質・材料、生産」分野

**化合物半導体電子・光デバイスのための
有機金属気相成長法の開発と大規模商用化への
先駆的貢献**



ラッセル・ディーン・デュプイ博士

米国 1947年生まれ
ジョージア工科大学
教授

パソコンやスマートフォンなどの情報通信機器の登場により、日常的に大量の情報が飛び交う時代になりました。この情報化社会を支える多様な情報端末や周辺機器には、さまざまな半導体デバイスが使われています。半導体は、電子の流れを制御することができる物質で、トランジスタをはじめとする種々の電気的特性をもつ電子デバイスを作り出せます。さらに2種類以上の元素を組み合わせることができる化合物半導体では、元素の組み合わせが生み出す多彩な特性によって、発光ダイオード(LED)・半導体レーザー・太陽電池などの種々の電子・光デバイスを実現できます。

化合物半導体の大規模商用生産には、有機金属ガスを原料とする「有機金属気相成長法(MOCVD)」という方法が幅広く用いられています。ラッセル・ディーン・デュプイ博士は、1970年代に化合物半導体の作製方法としてMOCVDに注目し、この手法により作製したデバイスが優れた実用特性を示すことを実証しました。デュプイ博士の研究によって化合物半導体電子・光デバイスの量産と商用化につながる道が大きく開かれました。

「生物生産、生態・環境」分野

**地球環境変動下にある海洋生態系に関する研究、
特にブルーカーボンの先導的研究への
貢献**



カルロス・M・ドゥアルテ博士

スペイン 1960年生まれ
アブドラ王立科学技術大学生物環境理工学部
特別教授

海洋は私たち人間社会にさまざまな恩恵をもたらしています。その一方で、海洋環境の悪化はますます深刻化しており、海洋生態系に悪影響を及ぼしています。

カルロス・M・ドゥアルテ博士は、地球環境変動下にある海洋生態系に関する研究の第一人者です。特に、ブルーカーボン（海洋生態系が吸収する炭素）に関する研究では、炭素吸収源としての海洋生態系の重要性を明らかにし、地球温暖化対策の新たな指針を与えるなど、大きな貢献をしています。

ドゥアルテ博士は、海洋生態系の中でも、塩生植物、マングローブ、海草によって構成される「沿岸植生域」が、最大のブルーカーボン貯蔵庫であることを発見しました。沿岸植生域の海底には、全海洋における年間堆積量の50%に相当するブルーカーボンが堆積し、しかも1,000年以上にわたってここに貯留されます。このことから、沿岸植生域は地球温暖化を抑制する上で最重要の生態系であることが明らかになりました。

一方、沿岸植生域は人間活動によってもっとも破壊された生態系であり、ドゥアルテ博士はその保全と再生に向けた活動も行っています。さらに、現存する海洋生態系の機能を活用することが、持続可能な地球の未来につながる鍵になるとドゥアルテ博士は指摘しています。その先見性は、私たちの希望の光となっています。

2024 受賞者

「資源、エネルギー、環境、社会基盤」分野

異常気象の理解と予測に資する 科学的基盤の構築



ブライアン・ホスキンス 博士

イギリス 1945年生まれ
レディング大学気象学科
教授



ジョン・ウォーレス 博士

米国 1940年生まれ
ワシントン大学大気科学科
名誉教授

2023年夏、北半球各地から熱波や大雨、干ばつによる被害が伝えられました。日本も記録的な猛暑になりましたが、6月に気象庁が発表した季節予報で高温傾向が予想されていました。

天気・天候はさまざまな要因が絡み合う複雑な現象ですが、現在では、コンピュータを用いた数値天気・天候予報が実用的な精度で発信されており、社会基盤として不可欠になっています。その背景には、コンピュータの発展や、観測と予報の技術向上があります。それに加え、多様な時空間規模における大気循環変動の実態やメカニズムの解明が進み、各地域の個々の天気現象ばかりでなく、遠く離れた場所で起こった大気循環変動の影響が地球規模でどう伝わるかを把握できるようになったことも重要な背景要因です。

このような気象学・気候力学の進展に、ブライアン・ホスキンス博士は理論・数値モデルの研究、ジョン・ウォーレス博士はデータ解析研究によって、1970年代からおおよそ半世紀にわたり大きく貢献してきました。盟友である両博士の研究成果を背景に発展してきた数値天気・天候予報は、今や地球温暖化に伴う異常気象を予測し、防災・減災につなげていくという大きな社会的責務を担うようになってきています。

「医学、薬学」分野

核内ホルモン受容体ファミリーの発見と 医薬品開発への応用



ロナルド・エバンス 博士

米国 1949年生まれ
ソーック研究所遺伝子発現研究室
教授

私たちの体の中には数多くのホルモンが存在し、体のさまざまな機能を調節しています。ホルモンは水溶性と脂溶性に分けられ、脂溶性ホルモンについては、細胞内の核までたどり着くことはわかっていましたが、その受容体は長らく未知のままでした。

ロナルド・エバンス博士は、世界に先駆けて次々と脂溶性ホルモンやビタミンの受容体の単離に成功し、これらの核内受容体は、共通の構造をもつ分子群（スーパーファミリー）であることを見いだしました。そして、核内受容体は、標的遺伝子の転写を調節する「転写制御因子」として働いていることを明らかにしました。

これにより創薬も加速し、現在ではアメリカ食品医薬品局（FDA）に承認されている薬のうち、核内受容体をターゲットにした薬は15%前後を占めています。

ヒトにおけるすべての核内受容体スーパーファミリー（48種類）の全体像を明らかにしたエバンス博士の功績は、学術界のみならず、社会的にも大きな貢献を果たしてきました。

2023 受賞者

「エレクトロニクス、情報、通信」分野

半導体レーザー励起光増幅器の開発を中心とする
光ファイバ網の長距離大容量化への顕著な貢献

中沢正隆 博士

日本 1952年生まれ
東北大学
卓越教授(DP)/特任教授



萩本和男 氏

日本 1955年生まれ
国立研究開発法人情報通信研究機構
主席研究員

私たちは、メールやSNS、オンライン会議などで日常的に世界とつながり、クラウドサービスを利用して大量のデータを保持するようになりました。インターネット上で利用できる情報リソースの、このような多様化と大容量化の背景には、多くの情報を高速で遠くまで送ることができる「光通信システム」が低価格で提供されるようになったことがあります。

1980年代、中沢博士と萩本氏は、当時、遠距離の光通信システムの実現に必要不可欠であるにも関わらず実用化が難しいとされていた「小型・高効率・広帯域の光増幅器」を、「エルビウム添加ファイバ」と「InGaAsP半導体レーザー」を組み合わせることによって実現しました。それからわずか5年ほどで、この光増幅器を搭載した中継器は、太平洋・大西洋横断海底光ケーブルをはじめ世界を結ぶ幹線系長距離伝送網に採用されました。当時の光通信システムの実用化を飛躍的に進展させるとともに、現在に至るまで、この技術を基礎として光通信システムの発展が続いています。

両氏が開発した光増幅器は、グローバルなインターネット社会を支える基幹技術である「長距離大容量光データ通信」の道を拓いたのです。

「生命科学」分野

遺伝子操作可能な光感受性膜タンパク質を用いた
神経回路の機能を解明する技術の開発

ゲロ・ミーゼンバック博士

オーストリア 1965年生まれ
オックスフォード大学
神経回路・行動学研究所
ウェインフリート生理学教授



カール・ダイセロス博士

米国 1971年生まれ
スタンフォード大学医学部 バイオエンジニアリング学科・
精神医学学科、ハーワード・ヒューズ医学研究所
教授

行動や思考、記憶、意思決定など、私たちがふだん行っているあらゆる振る舞いは、脳を構成する神経細胞の活動によって生み出されています。どの神経細胞のどのような活動パターンが、最終的にこれらの振る舞いを生み出しているのでしょうか。その因果関係を明らかにすることは、神経科学における重大なテーマです。

従来は、電気刺激や薬剤投与などの方法を用いて、特定の脳領域を活性化あるいは抑制化して、行動がどう変わるかを観察することで、その脳領域の役割が調べられてきました。しかし、こうした方法では、狙った神経細胞の活動だけを高精度に制御することは困難でした。

そこで新たに登場したのが、光を照射して狙った神経細胞の活動を自在にコントロールする方法です。生きた動物で使えるため、神経細胞の活動とそれによって生み出される行動との関係を直接調べることができます。

ミーゼンバック博士は、この技術の概念と原理を考案し、実証することに成功しました。そして、ダイセロス博士は、この技術をより簡便かつ高精度なものに発展させ、幅広い研究に応用できるようにしました。

光刺激を用いたこの技術は、いまや神経科学研究において不可欠なツールとなり、この分野に目覚ましい発展をもたらしています。そして、失明した人の視力回復やパーキンソン病の治療法の開発など医療への応用も期待されています。

2022 受賞者

「物質・材料、生産」分野

mRNAワクチン開発への先駆的研究



カタリン・カリコー博士

ハンガリー・米国 1955年生まれ
ビオンテック 上級副社長
ペンシルベニア大学脳神経外科 特任教授
セゲド大学 教授



ドリュー・ワイスマン博士

米国 1959年生まれ
ペンシルベニア大学医学大学院 教授
ペンシルベニア
RNAイノベーション研究所 所長

2020年12月、世界に先駆けて英米両国で新型コロナウイルスワクチンの接種が始まり、21年2月には日本でも接種が可能になりました。当初、開発には数年を要するとされたワクチンが約1年で量産にこぎ着けたことで、世界中で多くの命が救われ、経済的損失も抑えられました。現在、ワクチンは世界的なパンデミックの終息への大きな力となっています。短期間で開発されたのは、従来のワクチンとは異なる「mRNA（メッセンジャー RNA）ワクチン」です。

mRNAはDNAと同じ核酸の一種で、生体内でのタンパク質合成の設計図です。1990年代にはDNAとともに医療への応用が研究されましたが、望まない免疫反応を起こすことが障壁となり断念されました。

2005年、カタリン・カリコー博士とドリュー・ワイスマン博士は、mRNAを構成するウリジンを修飾核酸のシュードウリジンに置き換えると、望まない免疫反応を抑制できることを発見。2008年には、シュードウリジン化によって目的タンパク質の生産量が上がることも報告しました。この一連の知見は、閉ざされていたmRNAの医療への応用の道を拓き、今回の迅速なワクチン開発につながりました。

「生物生産、生態・環境」分野

観測に基づく先進的な定式化によるグローバルな生物圏の生産力推計と気候変動科学への目覚ましい貢献



クリストファー・フィールド博士

米国 1953年生まれ
スタンフォード大学ウッズ環境研究所 所長

将来の気候変動を高精度に予測するには、地球全体の生物圏の動態を踏まえた推計が不可欠です。特に、二酸化炭素（CO₂）の吸収源である植物が気候変動とどう相互作用しているかを明らかにしなければ、人為的なCO₂排出量の削減が、地球温暖化の進行をどの程度くい止められるかを知ることとはできません。

クリストファー・フィールド博士は、野外調査により生きた葉の観測データを積み重ね、それをもとに葉の光合成速度が環境によってどう変化するかを式で表せるようにしました。さらに、植物群落を大きな1枚の仮想的な葉として扱えるように式を発展させ、気候モデルや衛星観測、海洋研究との融合によって、陸海を合わせたグローバルな生物圏のCO₂吸収量の分布や、大気中CO₂濃度の上昇の原因を明らかにしました。

こうしたフィールド博士の研究は、温暖化対策の国際的枠組みである「パリ協定」やIPCC（気候変動に関する政府間パネル）など、今日の気候変動対策における科学的基礎となっています。

2021 受賞者

「資源、エネルギー、環境、社会基盤」分野

高効率シリコン太陽光発電デバイスの
開発

マーティン・グリーン博士

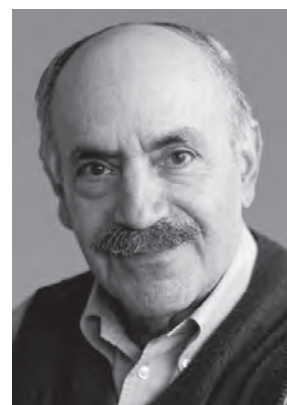
オーストラリア 1948年生まれ
ニューサウスウェールズ大学 教授

2010年代半ばに、太陽光発電が火力発電をコスト面で下回り、太陽光発電の普及による脱炭素社会の実現が現実味を帯びてきました。これは、太陽光発電デバイスのエネルギー変換効率の向上によりコストの低下が進み、大規模太陽光発電が可能になった結果といえます。

マーティン・グリーン博士は、1970年代から結晶シリコン太陽光発電デバイスのエネルギー変換効率を高める研究に取り組み、「電子と正孔の再結合を抑制することが重要である」として、さまざまな技術を提案してきました。中でも1999年にエネルギー変換効率24.7%（2008年に基準の変更で25.0%と認定）を達成したPERC構造は、現在、多くの結晶シリコン太陽光発電デバイスに採用されています。

また、博士が育てた多くの人材が、世界各地で大規模太陽光発電デバイスを事業化し、太陽光発電の普及に貢献しています。

「医学、薬学」分野

多段階発がんモデルの提唱と実証及びそれらが
もたらしたがん治療への貢献（共同受賞）バート・
フォーゲルシュタイン博士米国 1949年生まれ
ジョンズ・ホプキンス大学 教授ロバート・
ワインバーグ博士米国 1942年生まれ
ホワイトヘッド研究所 研究員
マサチューセッツ工科大学 教授

かつてがんは「不治の病」と言われましたが、現代ではその考えは大きく変わり、多くのがん患者が適切な治療を受けることでがんを克服できるまでになりました。また、がんの早期診断法や予防法も大きく進歩しました。

こうした進展の背景として、細胞のがん化の仕組みについての理解が著しく進んだことがあげられます。端的に言えば、「がんは1個の細胞内に複数の遺伝子の変異・異常が段階的に蓄積することによって発生する」というモデルが提唱され、それが実証されたことです。このモデルの基盤形成および実証に最も大きく貢献したのが、バート・フォーゲルシュタイン博士とロバート・ワインバーグ博士です。

2020 受賞者

「エレクトロニクス、情報、通信」分野

情報理論・符号理論に対する先駆的貢献



ロバート・ギャラガー博士

米国 1931年生まれ
マサチューセッツ工科大学名誉教授

テレビやパソコン、携帯電話など生活に身近な通信機器から、素粒子物理学や天文学などビッグデータを駆使する最先端の研究にいたるまで、デジタル情報通信は、今日の社会を支える基盤技術の一つです。

しかしながらデータ通信を行う際には、外部から入るノイズ（雑音）などの影響により、誤りが生じます。そこで、この誤りを検出して訂正するための方法が、長年にわたり研究されてきました。

ロバート・ギャラガー博士が提案したLDPC 符号（低密度パリティ検査符号：Low-Density Parity-Check Codes）は、きわめて高い信頼性があり、また実用面でも優れています。第5世代移動通信システム（5G）での採用をはじめ、高速大容量通信を支える技術として期待されています。

「生命科学」分野

古代人ゲノム解読による古人類学への先駆的貢献



スバンテ・ペーボ博士

スウェーデン 1955年生まれ
マックス・プランク進化人類学研究所 教授

私たちはどこから来たのか……。

「現生人類（ヒト）の誕生と進化」の解明は、古人類学の大きな課題の一つです。古人類学では、発掘された骨や歯の化石の形態をもとに、その進化や分類が論じられてきましたが、1980年代の中頃に、スバンテ・ペーボ博士は、DNAを抽出して解析する「遺伝学的手法」を取り入れ、以来この方法で現生人類の進化の核心に迫る成果を次々にあげてきました。

特に、ネアンデルタール人のDNA解析の結果から、現生人類の祖先とネアンデルタール人が交雑していたことを明らかにしました。また、ロシアのデニソワ洞窟から発掘された骨の化石のDNAからは、これまで知られていなかったデニソワ人の存在を明らかにしました。

博士は、古代人DNAの解析を通して、現生人類とはなにものかという根源的な問題に新たな光を当てたのです。

2019 受賞者

「物質・材料、生産」分野

らせん高分子の精密合成と医薬品等の
実用的光学分割材料の開発への先駆的貢献

岡本佳男博士

日本 1941年生まれ
名古屋大学 特別教授
中国ハルビン工程大学 特聘教授

化学組成が同じ分子どうしで、鏡に映した像が左手と右手のように重ね合わせることのできない立体構造をもつものがあります。このような場合、両者は鏡像異性体の関係にあるといえます。鏡像異性体どうしは融点・沸点などの物理的性質は同じですが、人体に対する生理作用が異なる場合があります、医薬品製造などでは大きな問題になり得ます。ところが、通常の化学合成で生成するのは鏡像異性体の混合物です。そこで、触媒を利用して片方だけを合成する技術が進む一方、生成した混合物を分ける利便性の高い分離法が広く使われるようになりました。それを実現させたのがらせん高分子です。一方向巻きのらせん高分子をシリカゲルに吸着させてカラムに充填し、これに混合物を注入すると、らせん高分子に捕捉されやすい一方の鏡像異性体はカラム内に長時間留まり、捕捉されにくいほうは先に流出します。岡本佳男博士は、一方巻きらせん高分子の合成に世界ではじめて成功し、さらにこれが鏡像異性体の分離に活用できることを示しました。実用化した製品は、医薬品・香料・機能性材料などの研究開発や製造に、世界中で広く使われています。高分子合成の基礎から実用に至る岡本博士の業績は、国際的に高く評価されるところです。

「生物生産、生態・環境」分野

食糧安全保障強化と気候変動緩和のための
持続的土壌管理手法の確立

ラタン・ラル博士

米国 1944年生まれ
オハイオ州立大学 特別名誉教授
炭素管理・隔離センター センター長

土壌は、食糧生産だけでなく、炭素隔離、環境浄化、物質循環、生物多様性の維持など環境保全にも重要で幅広い機能をもっています。ラル博士は、アフリカのサブサハラ地域で、「不耕起栽培法」によって、土壌侵食を防ぐとともに生物生産を安定化できることを実証し、その普及に努めました。通常の農業では土壌を耕すのに対し、土壌を耕さないことを基本とする不耕起栽培法は、ラル博士が土壌有機物の流出メカニズムに着目することで確立したものです。この成果を踏まえて、ラル博士は土壌と地球環境問題の関係の研究に歩を進めました。地球規模の炭素循環を解析した結果、土壌を適切に管理すれば、土壌が炭素を隔離し、大気中のCO₂を減少させるだけでなく、土壌が肥沃になり食糧生産も向上することを見いだしました。そして、ラル博士は、適切な土壌管理の重要性を国際社会に訴え続けた結果、その理念は、「フォーパーミル・イニシアチブ」という土壌保全の国際的な取り組みとして政策化され、国連の持続可能な開発目標 (SDGs) の推進とも密接に関わっています。

2018 受賞者

「資源・エネルギー、環境、社会基盤」分野

リチウムイオン電池の開発



吉野彰博士

日本 1948年生まれ
旭化成株式会社 名誉フェロー
名城大学 教授

リチウムイオン電池は充放電を行える二次電池の一種で、スマートフォンやノート型パソコンの電源として現在のモバイル社会を支えています。また、最近では、普及が進む電気自動車にも搭載され、走行時の環境影響物質の排出量を低減するのに貢献しています。吉野彰博士は、リチウムイオン電池を考案し、それが充放電を行えることを1980年代初めに実証しました。当時は、リチウム金属を負極とする電池が研究の主流で、正極材料や非水系の電解質溶剤に関する研究が盛んでした。吉野博士は、コバルト酸リチウムを正極、カーボン系材料を負極とし、独自のセパレーター技術、集電体技術と統合的に組み合わせることで、高電圧でエネルギー密度が高く、寿命の長い、かつより安全な二次電池を考案、実証しました。リチウムイオン電池の性能は、材料や製造法の改良で向上を続けており、今後もさらに応用が広がるものと期待されます。

「医学、薬学」分野

Bリンパ球・Tリンパ球系列の発見とそれがもたらした疾患の病態解明と治療法開発（共同受賞）



マックス・クーパー博士

米国 1933年生まれ
エモリー大学医学部 教授



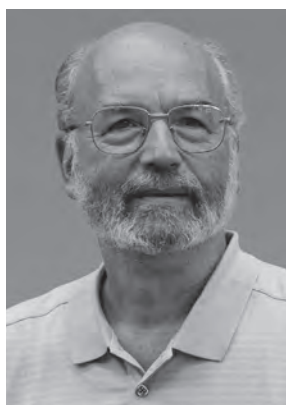
ジャック・ミラー博士

オーストラリア 1931年生まれ
ウォルター・アンド・イライザ・ホール
医学研究所名誉教授

マックス・クーパー、ジャック・ミラー両博士は、体内に侵入してきた異物に対する適応免疫をつかさどる2つの主要な細胞系列、「Bリンパ球」と「Tリンパ球」の存在を明らかにしました。Bリンパ球が抗体を産生して病原体などの異物を攻撃する一方、Tリンパ球はウイルスに感染した細胞やがん細胞を攻撃したり、Bリンパ球の抗体産生を補助したりします。ミラー博士は、謎の臓器とされていた胸腺がTリンパ球誕生の場であることをマウスを使って特定し、クーパー博士は、適応免疫に機能の異なる細胞系列があることを予見して、ニワトリを使った実験で2種類の細胞系列の存在を実証しました。両博士の先駆的な業績は、その後半世紀あまりにわたる免疫学の基礎・応用研究の発展の礎となりました。近年、注目を集めるがん治療薬や、免疫疾患に対する新薬も、両博士の発見があったからこそ誕生したと言えるでしょう。

2017 受賞者

「エレクトロニクス、情報、通信」分野

先導的暗号研究による
情報セキュリティへの貢献

アディ・シャミア博士
イスラエル 1952年生まれ
ワイツマン科学研究所 教授

インターネットなどのオープンなデジタルネットワークを利用して、私たちは便利な生活を営んでいます。その快適さの背景には、重要な情報が盗まれたり改ざんされたりすることなく、安全性が保たれているということがあります。その根幹となる種々の提案を行い、実現する方法を次々と開発してきたのが、アディ・シャミア博士です。

デジタルネットワークでの情報は2進数に置き換えられています。シャミア博士は、数学的な方法論を駆使して、画期的な暗号法「RSA暗号」、安全に情報を保管できる「秘密分散法」、秘匿する情報に触れることなく個人を特定できる「個人識別法」、多くの共通鍵暗号を解読できる汎用的な「差分解読法」など数多くの発明、提案を行いました。

また、暗号を処理するコンピュータなどの消費電力や雑音から暗号を読み解くサイドチャネル攻撃についても、大きな研究成果をあげています。

「生命科学」分野

CRISPR-Casによるゲノム編集機構の解明
(共同受賞)

エマニュエル・シャルパンティエ博士
フランス 1968年生まれ
マックス・プランク
感染生物学研究所 (ベルリン) 所長



ジェニファー・ダウドナ博士
米国 1964年生まれ
カリフォルニア大学バークレー校
教授

エマニュエル・シャルパンティエ、ジェニファー・ダウドナ両博士によって2012年に発表されたCRISPR-Casシステムによるゲノム編集は、遺伝子工学の革命的な新技術です。生命科学研究の使いやすいツールとして爆発的に広がったほか、育種、創薬、医療など幅広い分野で応用研究が進んでいます。この技術は、細菌がウイルスなどの感染に対して巧みに防御する仕組みの解明を通じて誕生しました。細菌は侵入したウイルスのDNAを自らのDNAに取り込んで記憶し、再度の感染の際には相手のDNAを認識すると、RNAのガイドによりCasタンパク質を誘導してこれを切断し、破壊します。この仕組みを利用して、どんな生物においても目的とするDNAを任意の部位で切断し、削除、置換、挿入など自在な編集を可能にしたのがこの技術です。

2016 受賞者

「物質、材料、生産」分野

ナノ構造を活用した 画期的な無機電子機能物質・材料の創製



細野秀雄博士

日本 1953年生まれ
東京工業大学 科学技術創成研究院
フロンティア材料研究所 教授
同大学 元素戦略研究センター長

新たな材料の発見は、産業や社会を変革する大きな力になります。細野秀雄博士の挑戦は、まだ誰も成し遂げていない領域で新たな機能性材料を創り出すことでした。例えば、ガラスのような「透明な酸化物」は、電気を通さないため電子機能材料には向かないとされていましたが、博士はそのナノ構造を研究することで「透明アモルファス酸化物半導体」を開発。現在では液晶や有機ELディスプレイなど幅広く世の中で役に立っています。そのほか、超伝導物質にはならないというのが常識とされていた鉄系化合物で高い超伝導転移温度を達成したり、典型的な絶縁体と考えられてきた物質のナノ構造を改変することで「電気を通すセメント」を開発するなど、画期的な無機電子機能物質・材料を次々と生み出しました。

「生物生産、生命環境」分野

ゲノム解析手法の開発を通じた 近代作物育種への貢献



スティーブン・タンクスリー博士

米国 1954年生まれ
コーネル大学名誉教授

人類は、農業を始めて以来、優れた作物を求めて品種改良を行ってきました。多くの場合、その手法は経験と勘と偶然に頼ったものでしたが、1980年代以降にゲノム解析技術が急速に進歩したことで大きく進歩しました。そして、この分野をリードし続けたのがスティーブン・タンクスリー博士です。

博士は、ゲノム解析により作物の染色体地図を作成し、その後、果実の大きさなど農業の生産性に関連した遺伝子を同定するなど、品種改良に役立つゲノム解析手法を開発しました。博士の研究がもたらしたゲノム情報と育種技術の融合は、優れた形質を持つ作物の選択精度を高め、求められる作物の計画的育種とかかる時間の短縮に大きく貢献しました。

2015 受賞者

「資源、エネルギー、社会基盤」分野

流域管理の革新的概念の
創出と水災害軽減への貢献

高橋裕博士

日本 (1927 ~ 2021)
東京大学名誉教授

私たち人間は、河川の恩恵を受けて生活していますが、ときに河川は増水による堤防決壊など甚大な水災害をもたらします。高橋裕博士は、戦後に生じた台風による洪水被害など、水災害についての現地調査とデータ解析を行い、明治以来の大規模な河川改修や開発による流域の変貌が、洪水規模の拡大につながったことを科学的に実証。そして、水災害の規模を小さくするためには、堤防などの河川改修だけでなく、調節池などによる流域管理や健全な水循環の維持が重要であるといった「総合治水対策」の考え方を提案し続けてきました。博士の提案は、河川や水全般に関わる様々な法律として結実しました。また、温暖化によって世界中で多発している水災害の対策にも生かされています。

「医学、薬学」分野

遺伝子治療の概念の提唱とその臨床応用
(共同受賞)

セオドア・フリードマン博士

米国 1935年生まれ
カリフォルニア大学
サンディエゴ校医学部 小児科 教授

アラン・フィッシャー博士

フランス 1949年生まれ
コレージュ・ド・フランス 教授
イマジン研究所 所長

「病気の治療を目的としてヒトの体内に遺伝子または遺伝子を導入した細胞を投与すること」を遺伝子治療と呼びます。ここ数年、これまで治療が難しかった先天性疾患や神経難病などに対する遺伝子治療の臨床効果が次々と報告されています。その原点となったのは、1972年に、セオドア・フリードマン博士が科学誌に発表した遺伝子治療の概念と研究の進め方に関する論文です。その後の基礎研究を経て、1990年に始まった臨床研究では明確な臨床効果を実証することができず、試行錯誤が続きましたが、1999年にアラン・フィッシャー博士は、X連鎖重症複合免疫不全症の患者に造血幹細胞遺伝子治療を実施し、劇的な効果が得られたことで遺伝子治療の有用性を実証しました。フリードマン博士が描いた遺伝子治療の夢とフィッシャー博士による実証研究が、現在の遺伝子治療を切り拓いたのです。

2014 受賞者

「エレクトロニクス、情報、通信」分野

大容量長距離光ファイバー通信用 半導体レーザーの先導的研究



末松安晴博士

日本 1932年生まれ
東京工業大学名誉教授

現在の情報化社会を支えているのが光ファイバーによる光通信ネットワークです。末松博士は、光エレクトロニクスの黎明期である1960年代初頭から光通信の研究に取り組んできました。博士の研究は、常に社会が求める性能を予測、理論と実験を組み合わせ実現するという「問題解決型研究」の先駆けでもありました。そして、1980年代初めに光ファイバーの損失が最小になる波長の光を発し、かつ情報を送るために光を高速で変調しても波長が安定した動的単一モードレーザーを完成。大容量長距離光ファイバー通信の実現に大きく貢献しました。

「生命科学」分野

遺伝子発現の制御機構としての ヒストン修飾の発見



デビッド・アリス博士

米国 (1951 ~ 2023)
ロックフェラー大学ジョイ・アンド・ジャック・フィッシュマン
記念教授

私たち人間の体は、約60兆個の細胞から構成され、そのほとんどが同じ遺伝子（DNA：デオキシリボ核酸）を持っています。それなのに皮膚、肝臓、脳神経など臓器ごとに違う形と機能を表すのはなぜなのでしょう。アリス博士は、1990年代の研究で染色体に含まれるヒストンというタンパク質を化学修飾する酵素が「遺伝子の活性制御」に重要な役割を果たしていることを発見。その成果は、生物が一つの受精卵から育っていく「発生」のメカニズムの解明や、ヒストンの化学修飾異常が関与したがんの治療薬の開発などに大きく貢献しています。

2013 受賞者

「物質、材料、生産」分野

半導体製造に革新的なプロセスをもたらした
化学増幅レジスト高分子材料の開発（共同受賞）

グラント・ウイルソン博士

米国 1939年生まれ
テキサス大学オースチン校 教授



ジャン・フレシエ博士

米国 1944年生まれ
アブドラ国王科学技術大学 副学長

過去半世紀に渡る半導体の技術革新を支える最も重要な基盤技術が、半導体に微細な回路を刻むリソグラフィである。ウイルソン博士、フレシエ博士は、1980年代初頭に故伊藤洋博士と共にリソグラフィに用いられるレジスト開発に取り組み、化学増幅レジストという新たな基盤技術を開発した。3博士が共同で開発したレジストを用いることで、深紫外線（deep UV:波長254nm）という波長の短い光を利用したリソグラフィが実現。この化学増幅レジストを改良することによって、半導体回路の最小幅が250nm以下の次世代集積回路の時代は切り開かれたのである。化学増幅レジストは、現代の先端技術である極端紫外線（EUV:波長1～10nm）や電子線を用いたリソグラフィにおいても重要な技術であり、新たなエレクトロニクス産業界の発展を支える基盤技術ともなっている。

「生物生産、生命環境」分野

深海生物の生態と多様性の研究を通じた
海洋環境保全への貢献

ジョン・フレデリック・グラスル博士

米国 （1939～2018）
ニュージャージー州立ラトガース大学名誉教授

水深200mを超える深海は、光合成に必要な太陽光がほとんど届かないため、長い間、限られた生物しか生息していないと考えられてきたが、1977年に太平洋の海底にブラックスモーカーと呼ばれる熱水噴出孔が発見され、その周囲に見たこともない多種多様な生物が記録された。海洋生物学者のグラスル博士は、自ら有人潜水調査艇を用いた生態調査を組織し、深海には太陽光ではなく地球内部から供給される化学物質を利用する化学合成生態系が存在することなどを明らかにした。

博士は、1980年代、1990年代における研究を通じて、深海には熱帯雨林にも匹敵する豊かな生物多様性があることを明らかにした。さらに2000年に全海洋生物の多様性、分布、個体数を明らかにする10カ年プロジェクトである「海洋生物センサス」(CoML: Census of Marine Life) を創設。その研究成果は、20世紀以降、急速に失われつつある海洋生態系の保全に大きく貢献している。

2012 受賞者

「環境、エネルギー、社会基盤」分野

世界最高性能Nd-Fe-B系 永久磁石の開発と省エネルギーへの貢献



佐川真人博士

日本 1943年生まれ
インターメタリックス株式会社 代表取締役社長

高度に工業化された現代社会を支える基盤材料の一つが永久磁石である。より強力な磁石に対する期待に応えるべく1960年代に開発されたのがSm-Co（サマリウム-コバルト）系磁石であったが、コバルトが希少資源であるため応用範囲は限られていた。こうしたなか佐川博士が挑戦したのは、豊富な資源である鉄を用いた永久磁石の実現である。佐川博士は従来の磁性材料とは全く異なる視点から研究開発に取り組んだ。そして、1982年にSm-Co系磁石の最大エネルギー積の記録を塗りかえる世界最強のNd-Fe-B（ネオジム-鉄-ほう素）系磁石を発見するとともに、その実用化を成し遂げた。ネオジム磁石を利用したモーターは、小型軽量で高い効率を得られるため、産業用から家庭用のエレクトロニクス製品の省電力化や風力発電等の新エネルギーの高効率化を実現するなど地球環境問題の解決にも大きく貢献している。

「健康、医療技術」分野

がん特異的分子を標的とした新しい治療薬の開発 （共同受賞）



ジャネット・ラウリー博士

米国 (1925 ~ 2013)
シカゴ大学 プラム・リース特別教授



ブライアン・ドラッカー博士

米国 1955年生まれ
オレゴン健康科学大学 教授
ナイトがん研究所長



ニコラス・ライドン博士

米国 1957年生まれ
ブループリントメディスン社 創立者、取締役

慢性骨髄性白血病（CML）は、全ての血液細胞のもととなる造血幹細胞が、がん化して起こる病気である。2001年に分子標的薬であるイマチニブが登場したことで治療成績が劇的に改善された。イマチニブ開発の原点となったのはラウリー博士が、1973年にCML患者の白血球で9番染色体と22番染色体が組み替えを起こしていることを発見したことである。ドラッカー博士とライドン博士は、この染色体の組み替えで生じたBCR-ABLタンパク質を標的として、その働きを抑制する薬の開発に成功した。現在では、分子標的薬は、がんや自己免疫疾患などの治療に欠かせない存在になっているが、ラウリー博士、ドラッカー博士、ライドン博士が成し遂げた成果が、分子標的薬開発の重要性を示し医学研究にとって重要な道標となった。

2011 受賞者

「情報・通信」分野

UNIXオペレーティングシステムの開発
(共同受賞)

デニス・リッチー博士

米国 (1941 ~ 2011)
ベル研究所特別名誉技師



ケン・トンプソン博士

米国 1943年生まれ
グーグル社 特別技師

現在のコンピュータシステムでは、ワープロや表計算などの業務を行うためのアプリケーションソフトウェアの他に、オペレーティングシステムと呼ばれる基本ソフトが用いられている。リッチー、トンプソン両博士は、1969年にUNIXと呼ばれる先進的なオペレーティングシステムを開発した。当時のオペレーティングシステムは、複雑で無秩序に大規模化していたが、UNIXでは小さくモジュール化したプログラムを組み合わせることで安定性と高速性を実現。UNIXの優れた設計思想は、多くのコンピュータ技術者に受け継がれ、インターネットをはじめとする高度情報化社会の発展を支えてきた。

「生命科学・医学」分野

インターロイキン6の発見から疾患治療への
応用への貢献 (共同受賞)

岸本忠三博士

日本 1939年生まれ
大阪大学名誉教授、元総長



平野俊夫博士

日本 1947年生まれ
大阪大学 教授、
医学系研究科長・医学部長

ヒトの体は、外部から侵入してきた細菌やウイルスなどを察知し、これを排除する「免疫」という仕組みを持っている。免疫は、リンパ球 (T細胞、B細胞)、マクロファージなどさまざまな細胞が係わる複雑なシステムであるが、細胞同士の情報を伝達するのに重要な役割を果たしている物質がインターロイキンである。岸本、平野両博士は、抗体を作るのに重要な役割を果たしているインターロイキン6 (IL-6) を純化し、1986年に遺伝子のクローニングに成功した。また、両博士は、IL-6には多種多様の機能があることを解明し、こうした研究成果は生命科学の進歩や炎症性疾患治療薬の開発などに貢献した。

2010 受賞者

「工業生産・生産技術」分野

垂直磁気記録方式の開発による 高密度磁気記録技術への貢献



岩崎俊一博士

日本 1926年生まれ
東北工業大学 理事長、東北大学名誉教授

20世紀のコンピュータ技術の進歩に重要な役割を果たしたのは、大規模集積回路 (LSI) と情報記録を担うハードディスク装置 (HDD) である。HDDの小型化・大容量化がインターネットによる情報化社会を実現したといっても過言ではない。そして現在、クラウドコンピューティングなど次世代システムの実現を陰で支えているのが、垂直磁気記録方式によるHDDのさらなる大容量化である。岩崎博士は、磁気記録の原理に関わる研究をヒントに、従来の水平磁気記録方式より大容量化に有利な垂直磁気記録方式を開発。1977年にこの方式を世界に提唱して以来、実用化のための研究開発を続けてきた。

「生物生産・生命環境」分野

窒素などの物質循環解析に基づく 地球環境問題解決への貢献



ピーター・ヴィトーセク博士

米国 1949年生まれ
スタンフォード大学 生物学部 教授

産業革命以降、人類の経済活動は拡大し続け、相対的に地球は小さくなってしまったといえる。生態系生態学の専門家であるヴィトーセク博士は、生態系における窒素、リンなどの栄養素の物質循環の研究を基に、さまざまな要因が生態系にどのような影響を与えているかを分析する「生物地球化学」の分野に先駆的な業績を挙げてきた。博士は、研究成果を通じて人間活動が地球環境に深刻な影響を与えていることを明らかにするとともに、問題解決のためのヒントを提供し続けている。

2009 受賞者

「自然と共生する持続可能な技術社会形成」分野

『成長の限界』報告を基盤とする持続可能な
社会形成への貢献

デニス・メドウズ博士

米国 1942年生まれ
 ニューハンプシャー大学名誉教授
 インタラクティブラーニング研究所 代表

私たち人類にとって、かけがえのない存在である地球は、同時に限りある存在である。その地球上で人類が存続していくために実現しなければならない課題が「持続可能な社会」の実現だといえる。そして、今から30年以上も前に、このことを科学的な分析により訴えたのがメドウズ博士を中心とした研究グループであった。1972年に発表され世界に衝撃を与えた報告書『成長の限界』は、現在でも私たち人類の進む道を照らし続けている。

「医学・工学の融合における疾患への技術の展開」分野

核医学における
断層イメージングに対する貢献

デビット・クール博士

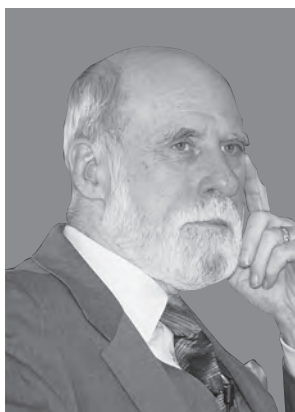
米国 (1929 ~ 2017)
 ミシガン大学医学部 放射線医学 教授

現在、コンピュータ断層撮影 (CT) などさまざまな画像診断装置が医療の現場で活躍している。クール博士は、1950年代の後半、放射性同位元素の体内分布を断層撮影する実験を世界に先駆けて行った。そして、1960年代後半に単光子放出断層撮影装置 (SPECT) を開発。ヒトの体の断層写真を得ることに世界で初めて成功した。この研究は、X線CTや磁気共鳴画像法 (MRI) の開発に大きな影響を与えたほか、近年、がんの早期発見などに威力を発揮している陽電子放出断層撮影 (PET) の実現をもたらした。

2008 受賞者

「情報通信の理論と技術」分野

インターネットのネットワーク設計概念と 通信プロトコルの創成（共同受賞）



ヴィントン・サーフ博士

米国 1943年生まれ
グーグル社副社長兼
チーフ・インターネット・
エバンジェリスト



ロバート・カーン博士

米国 1938年生まれ
コーポレーション・フォー・ナショナル・
リサーチ・イニシアチブ 会長、CEO、社長

インターネットの登場は、人類の生活様式を一変させるネットワーク社会を拓いた。このインターネットの基本概念を生み出し、それを実現するための通信プロトコルであるTCP/IPを提唱したのが、サーフ博士とカーン博士である。「インターネットの父」と称される両博士は、現在も情報通信の最先端で指導者として活躍している。

「ゲノム・遺伝医学」分野

遺伝医学の確立と発展



ビクター・マキューズィック博士

米国 (1921 ~ 2008)
ジョンズ・ホプキンス大学
医学部遺伝医学部門 教授

ヒトゲノム計画が完了し、我々はDNAという文字列で書かれた遺伝情報のほぼ全文を入手した。ところが、この中から病気の治療に役立つ部分を読み解いていくのは、これからである。マキューズィック博士は、半世紀も前から遺伝病についての知見を蓄積し、ゲノム上の病気に関わる部分を遺伝子地図としてまとめる重要性を、指摘してきた。今日この成果は世界中の研究者や臨床医に共有され、遺伝医学に欠かせないものとなっている。

2007 受賞者

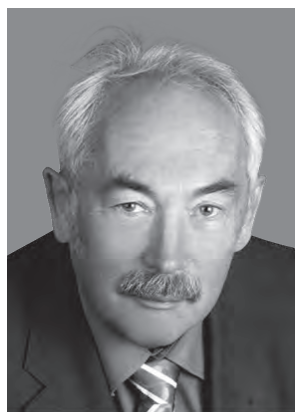
「基礎研究が発信する革新的デバイス」分野

巨大磁気抵抗効果 (GMR) の発見と革新的スピンエレクトロニクス・デバイスの創生 (共同受賞)



アルベール・フェール博士

フランス 1938年生まれ
パリ南大学 (パリ第11) 教授



ペーター・グリュンベルク博士

ドイツ (1939 ~ 2018)
ユーリヒ固体物理研究所 教授

パソコンの情報記憶に使われているハードディスクは、年々加速的に性能を向上させ、いまや、パソコンだけでなく、携帯音楽機器、ビデオカメラなど家電にも使われるようになっている。このように、ハードディスクが飛躍的に記録容量を増やし活躍の場を広げるにあたっては、「巨大磁気抵抗効果の発見」という画期的な技術革新があった。それを成し遂げたのが、フェール博士とグリュンベルク博士の2人である。

「共生の科学と技術」分野

人と共生する
熱帯林保全への貢献

ピーター・ショウ・アシュトン博士

イギリス 1934年生まれ
ハーバード大学
チャールズ・ブロード森林学名誉教授

近年、熱帯林の破壊がすさまじい勢いで進んでいる。熱帯林は、多様な生物が生活する種の宝庫であり、ここが損なわれることは地球全体の環境を大きく損なうと考えられる。アシュトン博士は、特に東南アジアの熱帯林地域で、植物の系統分類学と生態学において膨大な研究成果をあげ、その知見に基づき、熱帯林の保全活動に大きく貢献した。

2006 受賞者

「地球環境変動」分野

衛星観測による大気構造・組成の先駆的研究並びに
気候変動アセスメントへの国際的取り組みにおける貢献



サー・ジョン・ホートン博士

イギリス (1931 ~ 2020)

ハドレー気候研究センター名誉科学者及び
同センター前理事長

ホートン博士は、気象衛星による観測が始まった当初の1970年代、高層大気の温度や成分を測るため、自らの理論を基にした新たな観測手段を開発。地球全体にわたる大気の立体的な温度構造、オゾンなどの微量成分の分布を明らかにする道を拓いた。それらの研究を発展させて国際的な気候変動研究をすすめるため、ハドレー気候研究センターを設立。気候変動に関する政府間パネル (IPCC) では議長団にあって、第1次、第2次、第3次の評価報告書を取りまとめるうえで中心的な役割を果たした。

「治療技術の開発と展開」分野

スタチンの発見と開発



遠藤章博士

日本 (1933 ~ 2024)

株式会社バイオファーム研究所 取締役所長

遠藤博士は、血中コレステロール値を下げる画期的な物質「ML-236B」(現在は「コンパクチン」とよばれる)を1973年に青カビから発見し、これがヒトにも有効であることを確かめた。これをきっかけとしてコンパクチンの仲間は世界各国で研究されるようになり、その中からいくつもの高コレステロール血症治療薬が誕生した。「スタチン」と総称されるこれらの薬は、現在、世界中で約3,000万人の人々に使われ、心筋梗塞や脳梗塞の予防に役立っている。

2005 受賞者

「情報・メディア技術」分野

自然言語処理及び
画像の知的処理に対する先駆的貢献

長尾真博士

日本 (1936 ~ 2021)
独立行政法人情報通信研究機構 理事長

長尾博士は、機械翻訳、自然言語処理、画像処理の先駆的研究者であり、数々の成果を挙げるとともに、この分野の研究者に多大な影響を与えてきた。特に機械翻訳では日英・英日翻訳システムの基礎を確立させるとともに、用例翻訳方式を世界で初めて提唱した。画像処理では、フィードバック解析機構を初めて導入し、その後の多くの研究に影響を与えた。これらの自然言語処理技術、画像処理技術を総合的に利用して、世界に先駆けて電子図書館のプロトタイプシステムを開発し、図書館の情報化推進に貢献した。博士は、これらの分野の先駆的研究にとどまらず、機械翻訳国際連盟、言語処理学会などを創設し、国内外のこの研究を先導してきた。

「細胞生物学」分野

細胞接着の分子機構解明における基本的貢献
(共同受賞)

竹市雅俊博士

日本 1943年生まれ
独立行政法人理化学研究所
発生・再生科学総合研究センター長



エルキ・ルースラーティ博士

米国 1940年生まれ
バーナム研究所 教授

細胞接着は、組織や器官の構築において基本となる重要な現象である。竹市、ルースラーティ両博士は細胞接着の複雑な現象において、中核となる素過程を抉り出し、その機構を分子レベルで解明することに成功した。細胞接着の異常は転移癌などの多くの難病と深くかかわり、両博士の業績はこれらの原因解明と治療法の開発にも大きく寄与することと期待される。

2004 受賞者

「環境改善に貢献する化学技術」分野

水の光分解触媒の発見と環境触媒への展開 (共同受賞)



本多健一博士

日本 (1925 ~ 2011)
東京大学名誉教授



藤嶋昭博士

日本 1942年生まれ
財団法人神奈川科学技術アカデミー
理事長

本多、藤嶋両博士は、二酸化チタン単結晶電極に太陽光を照射することで水の水素と酸素への分解が起こること（本多—藤嶋効果）を示し、人工光合成研究および太陽光と水から水素エネルギーを得る研究の先駆けとなった。さらに、二酸化チタンの強い酸化力を利用する多様な光触媒材料を開発し、環境保全に資する光触媒産業を生みだしている。これらの業績は、今後の社会の持続的発展に対するきわめて大きな貢献をした。

「生態系の概念に基づく食料生産」分野

大陸棚生態系の理解と持続的利用への貢献



キース・セインズベリー博士

ニュージーランド 1951年生まれ
オーストラリア連邦科学産業研究機関
海洋研究部門 主任研究員

セインズベリー博士は大陸棚生態系の底魚資源を中心とした個体群動態の解析と実験的管理などを含む基礎研究に基づいて、持続可能な漁業生産を目指す資源管理戦略の立案に極めて重要な役割を果たし、オーストラリアの海洋政策の策定と実施に非常に大きく貢献した。博士は、オーストラリア海域のみならず他の熱帯や温帯海域における水産資源の持続的利用につながるパラダイムの発展にも大きく貢献した。

「生物多様性保全の科学と技術」分野

生物多様性の研究と保全に貢献する基礎調査・ 実験・理論を包含する業績



ジョン・ロートン教授

イギリス 1943年生まれ
自然環境研究会議 理事長

ロートン教授は生物多様性を維持する機構の基礎的研究に大きな成果を上げた。解析の対象とした生物群は動物（鳥類、哺乳類、昆虫類など）と植物から広く選ばれ、ある種が他の多様な種とどのように共存するかの研究に貢献した。また、生物多様性保全のための基礎調査を行い、資料解析とともに、理論的に保全の方向を推論した。さらに、鳥類を中心に、生物多様性の保全に向けた活動を推進した。

2003 受賞者

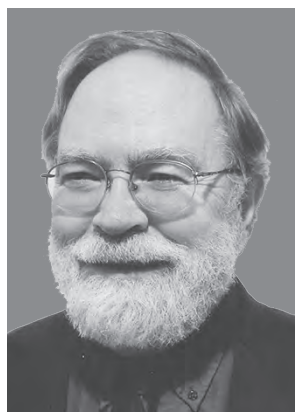
「複雑さの科学技術」分野

複雑系における普遍的概念の創出
—カオスとフラクタル（共同受賞）

ブノワ・B・
マンデルブロー博士

米国 （1924～2010）
エール大学 数学部数理科学科 教授
IBM トーマス・J・ワトソン研究所
名誉特別研究員

複雑な現象を要素に分解することなく捉え、その性質を明らかにすることは現代の科学技術にとってきわめて重要である。マンデルブロー博士は、フラクタルという概念を提唱し、複雑な図形の奥に潜む共通の幾何学構造を明らかにすることに成功した。一方、ヨーク博士はカオスという概念を提唱し、時間に伴い複雑な変化をする動的な現象の背後に共通の力学構造があることを明らかにした。今や、カオスもフラクタルも複雑で多様な現象の奥に潜む普遍的な仕組みであることが明らかになり、その応用も進んでいる。



ジェームズ・A・ヨーク博士

米国 1941年生まれ
メリーランド大学 物理科学技術研究所
数学、物理学教授

「医学における視覚化技術」分野

磁気共鳴機能画像法の
基礎原理の発見

小川誠二博士

日本 1934年生まれ
財団法人 濱野生命科学研究財団
小川脳機能研究所 所長

小川博士は、ヒトの体の生理的活動を非侵襲な視覚化技術にて測定する基本原理を発見し、広範な生命科学研究ならびに臨床医学応用への基礎を築いた。特に磁気共鳴画像法（MRI）において、生理現象によって生じる信号変化を視覚化するBOLD（Blood Oxygenation Level Dependent）法の原理を確立した功績は大きく、ヒトの脳機能解析・臨床診断への道を拓いた。

2002 受賞者

「計算科学・技術」分野

ワールドワイドウェブの
発明・実現・発展と
それによる文化への貢献



ティモシー・J・バーナーズリー博士

イギリス 1955年生まれ
マサチューセッツ工科大学
計算機科学研究所 主席研究員

バーナーズリー博士は、インターネットの最も重要な利用技術であるワールドワイドウェブ (WWW) の発明者であり、それを最初に実現し発展させた。また、様々な情報からなるハイパーテキストを作成するハイパーテキスト作成言語を設計・実現し、WWWを科学技術者だけでなく広く人々が活用する道を拓いた。WWWによって、個人や組織のホームページによる新しい通信・交流や電子商取引などが実現され、新聞・出版や電子メディアなどへも革命的な影響を与えつつある。また、WWWは、インターネットおよびパソコンの普及と相俟って、世界における情報・通信のグローバル化を促進し、人類の文化とその発展に極めて大きく寄与するものとなっている。

「発生生物学」分野

哺乳類の発生生物学研究の開拓 (共同受賞)



アン・マクラーレン博士

イギリス (1927 ~ 2007)
ウエルカムがん研究所 客員主任研究員



アンジェイ・
タルコフスキー博士

ポーランド (1933 ~ 2016)
ワルシャワ大学動物学研究所 所長

マクラーレン博士とタルコフスキー博士は、マウスをモデル動物として、初期胚の培養操作技術を開発し、哺乳類の発生生物学の基礎を築いた。特にキメラ胚の特性にもとづいて、初期胚の細胞が持つ発生運命についての著しい柔軟性を明らかにし、また性決定の機構、性を異にする両親から受けついだ遺伝情報の異なった働き、発生過程における細胞間や組織間の相互作用など、哺乳類の胚発生の基本問題についての解明の道を拓いた。

2001 受賞者

「環境適合材料の科学と技術」分野

環境調和型高エネルギー密度
リチウム二次電池用電極材料の発見

ジョン・B・グッドイナフ博士

米国 (1922 ~ 2023)
テキサス大学 教授

グッドイナフ博士は固体科学分野において顕著な研究業績をあげ、基礎科学に多大の貢献をした。特に遷移金属化合物の伝導性、磁性の研究、超イオン伝導体の研究は広く知られている。これらの広範な研究成果と優れた洞察力により、高性能リチウムイオン電池用電極材料を発見し、高容量可搬型二次電池への道を拓いた。これらは環境に優しいだけでなく二酸化炭素削減にも有効である。

「海洋生物学」分野

生物海洋学・水産海洋学の発展と
水産資源及び海洋環境の保全に対する貢献

ティモシィ・R・パーソンズ博士

カナダ (1932 ~ 2022)
ブリティッシュコロンビア大学名誉教授

パーソンズ博士は、海洋生態系を構成する生物とその環境に関する研究を推進して、生物海洋学を確固たるものとした。また、それまで漁業資源の個体群動態に関する研究ではあまり考慮されていなかった環境条件と食物網の諸関係を重視した水産資源管理の戦略を提唱し、水産海洋学の発展に進歩的な役割を果たした。

2000 受賞者

「都市計画」分野

生態学的都市計画プロセスの 確立と土地利用の評価手法の提案



イアン・L・マクハーグ教授

米国 (1920 ~ 2001)
ペンシルベニア大学名誉教授

マクハーグ教授は、都市計画に生態学的思想を導入すると共に、地形、水系、植生、歴史記念物などのマップを重ね合わせて環境のエコシステムを視覚化し、土地利用の適合性と制約条件を明示する革新的な土地利用評価システムを開発した。無秩序な都市開発が進む1960年代に自然の持つ豊かな潜在的能力を活かす生態学的都市計画を提案した画期的業績により、教授はエコロジカル・プランニングの創始者と呼ばれており、その方法論は地球環境時代の都市計画にも大きな影響を与えている。

「生体防御」分野

免疫グロブリンEの発見と アレルギー発症機序の解明



石坂公成博士

日本 (1925 ~ 2018)
ラホイアアレルギー免疫研究所名誉所長

喘息、花粉症などのアレルギー疾患は、生活環境の悪化とともに世界的に多くの人々が罹患し、近年その患者数は増加の傾向にあり、人類が今日的に直面している大きな課題となっている。石坂博士は、アレルギーを起こす原因物質として、第5番目の免疫グロブリンE (IgE) を発見し、アレルギーを分子レベルで理解することを可能にするとともに、IgE を介して起こるアレルギーの細胞性機序も発見した。これらの発見は、現在の生命科学研究に多くの影響を与えた画期的な業績であり、医学・医療の発展に大きく貢献した。

1999 受賞者

「情報技術」分野

高信頼デジタル通信・放送・
記録のための符号理論の確立

ウェスレイ・ピーターソン博士
米国 (1924 ~ 2009)
ハワイ大学マノア校 情報科学部 教授

ピーターソン博士は符号理論のバイブルとも呼ばれる著書「誤り訂正符号」を出版し、この分野の基礎を築いた。博士は、現代代数に基づく代数的符号理論の枠組みを確立するとともに、誤り検出や誤り訂正の実際的な装置化法を発明して、誤り訂正符号の産業応用に決定的な貢献をした。今日の高信頼デジタル通信・放送・記録システムは何らかの形で博士の研究成果を利用している。

「生命科学における分子認識と分子動態」分野

ヒト主要組織適合抗原分子群の三次元構造と
抗原ペプチド結合機構の解明 (共同受賞)

ジャック・
ストロミンジャー博士
米国 1925年生まれ
ハーバード大学 分子細胞生物学 教授



ドン・ワイリー博士
米国 (1944 ~ 2001)
ハーバード大学 生化学・生物物理学 教授

ストロミンジャー、ワイリー両博士は共同でヒト主要組織適合抗原 (MHC) クラス I 及びクラス II 分子の三次元構造を初めて明らかにした。両博士の研究は自己由来又は感染病原体などの非自己由来の抗原ペプチドが如何にして MHC 分子に提示され、Tリンパ球の免疫応答が開始されるのかについて分子・原子レベルでの理解を可能にした画期的業績である。この研究は同時に自己免疫疾患、臓器移植、腫瘍免疫、感染症などの研究に新しい視点を提供し、医学の発展にも大きく貢献した。

1998 受賞者

「新材料の設計・創製と機能発現」分野

人工超格子結晶概念の創出と実現による 新機能材料の発展への貢献



江崎玲於奈博士

日本 1925年生まれ
前筑波大学 学長

江崎博士は「半導体超格子」の概念を提案し、実際にその構造を実現し、予言どおり特異な負の微分抵抗効果や共鳴トンネル効果を発見した。その超格子の概念は他の研究者に大きな影響を与え、高速トランジスタ HEMT 多重量子井戸構造半導体光デバイス、巨大磁気抵抗効果の基礎となっている。なお、博士は1973年に半導体 PN 接合のトンネル効果の発見によりノーベル物理学賞を受賞しているが、超格子は博士のなしとげたもう一つの偉大な業績である。

「農業生産のバイオテクノロジー」分野

遺伝子組換え植物作出の理論と方法の確立 (共同受賞)



ジョゼフ・S・シェル博士

ベルギー (1935 ~ 2003)
マックスプランク育種学研究所・
植物育種遺伝学研究部 部長



マルク・C・E・ファン
モンタギュー博士

ベルギー 1933年生まれ
ゲント大学 教授、
理学部遺伝学研究室 主任

シェル、ファン モンタギュー両博士は、アグロバクトリウムの感染による植物腫瘍の形成が、この細菌に含まれる一部の遺伝子が植物の核ゲノム中に組み込まれるために起こることを明らかにし、この系を用いた、植物ゲノムに外来の遺伝子を効率よく組み込ませる方法を確立した。この業績は、今日の遺伝子組換え植物作出の発展の基礎となっている。

1997 受賞者

「人工環境のためのシステム技術」分野

ロボット産業の創設と
全地球的技術パラダイムの創出（共同受賞）ジョセフ・F・
エンゲルバーガー博士米国（1925～2015）
ヘルプメイト・ロボティクス株式会社
取締役会長

吉川弘之博士

日本 1933年生まれ
前東京大学総長

エンゲルバーガー博士は、ロボットという機械が産業界全般に革新的な生産性の向上をもたらすことを早くから予見し、世界に先駆けてその開発と実用化に成功した。その結果、製造業を中心とする第二次産業の画期的な生産性向上を実現させることによって、世界経済の長期にわたる拡大と発展に大きく寄与した。

吉川博士は、環境破壊、資源の枯渇、過当競争などの地球規模の問題にたいして、地球全体の生産性と人工環境が最適になることを主目的とした設計生産工学の研究を行った。そしてものづくりに係わる知識体系の著しい専門領域化が、こうした問題の解決を困難にしていることを論証し、一般設計学という学問分野を開拓してこれら問題解決のための知識体系化をめざした人工物工学を提唱した。

「医学におけるバイオテクノロジー」分野

がんの原因に関する基本概念の確立（共同受賞）



杉村隆博士

日本（1926～2020）
国立がんセンター名誉総長
東邦大学学長

ブルース・N・エームス博士

米国（1928～2024）
カリフォルニア大学バークレー校
生化学・分子生物学部 教授

杉村博士は、1957年に変異原物質である4-ニトロキノリン-1-オキシドが発がん物質であることを発見した。1967年には変異原であるN-メチル-N'-ニトロ-N-ニトロソグアニジンの経口投与によりラットに胃がんを発生させることに成功し、また、多くの発がん物質が変異原物質であることを証明した。その後、日常摂取している加熱食品中に存在するヘテロサイクリックアミンの構造をもつ多くの発がん物質を分離・同定した。さらに博士は多段階発がん過程における遺伝子変化の解析に研究を進展させている。博士は環境中の発がん物質をその変異原性を指標として同定できることを明らかにし、がんはDNAの変化によって発生するという発がんの基本概念の確立に基盤的な貢献をした。

エームス博士は、1971年にサルモネラ菌を用いた試験管内での効率的な変異原物質の検出法を作製した。この方法を用いて、多くの発がん物質が変異原物質であることを明らかにした。この博士が開発した「エームス試験」は世界中の研究機関、企業や環境規制を行う機関で環境中の発がん物質・変異原物質の検索の基本技術となっている。また、この方法は発がん物質・変異原物質の代謝の研究にも広く使用されている。博士は内因性活性酵素の発がんにおける役割の解明や老化の機構解明に研究を進展させている。博士は化学物質の持つ発がん性と変異原性の関係を明らかにし、がんはDNAの変化によって発生するという発がんの基本概念の確立に基盤的な貢献をした。

1996 受賞者

「情報、コンピュータ、および通信システム」分野

広帯域・低損失光ファイバ 通信の先導的研究



チャールズ・K・カオ博士

米国 (1933 ~ 2018)
香港中文大学 学長

大きな社会的変革をもたらすであろうとして期待されている光通信技術の研究は1960年のレーザーの発明により実質的に開始され、光源、伝送路、そして光検出器などの研究が行われ始めた。カオ博士は、その初期において、光ファイバが大容量の伝送路に適していることに着目し、予測される損失の大きさや許容される光電力の大きさから伝送距離を推定するなどして、光ファイバを用いた大容量光通信の可能性を具体的に予測し、光ファイバ伝送路開拓の先駆的で、先導的な役割を果たしたものであり、その後の光通信技術の発展に大きな影響を与え、国際的に極めて顕著な貢献をした。

「神経科学」分野

小脳の機能原理と 神経機構の解明



伊藤正男博士

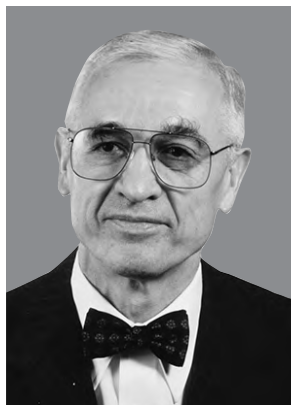
日本 (1928 ~ 2018)
特殊法人理化学研究所
国際フロンティア研究システム長
日本学術会議 会長

伊藤博士は長年、電気生理学、細胞生物学、システム理論、さらに分子生物学の手法を駆使して小脳の運動調節機序を研究してきた。まず小脳の出力を司るプルキンエ細胞がもっぱら抑制作用をもち、その化学伝達物質がガンマーアミノ酪酸であること、さらに小脳片葉の神経回路網に長期抑制が起こり、このシナプス可塑性により前庭動眼反射の動特性が適応制御性に変化すること、すなわち学習能力が発現することを明らかにした。さらに分子生物学的に長期抑圧の分子過程を明らかにし、長期抑圧の効果を検証した。これらの知見はひとり小脳の運動学習機能にとどまらず、脳の思考過程にも適用でき、これからの脳研究に与えたインパクトは甚大である。博士はまた国内外において神経科学関連学会の会長を務め、斯学の発展に寄与した。

1995 受賞者

「材料プロセス技術」分野

化合物半導体の物理的原理の洞察及びプロセス技術に基づく創造的業績を通しての発光ダイオード及びレーザーなど、オプトエレクトロニクスにおける基礎研究並びに実用化に対する顕著な貢献



ニック・ホロニアック Jr. 博士

米国 (1928 ~ 2022)

イリノイ大学 教授

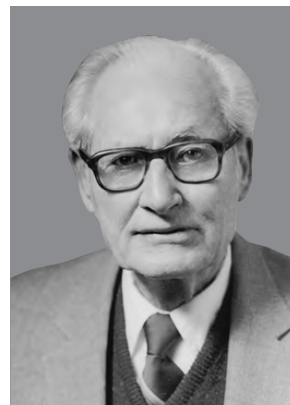
ホロニアック博士は、1951年以来半導体プロセス技術の研究を続け、現在世界中で使われているシリコン・コントロールド・レクチファイアを開発した。

1960年以降、自ら開発した化合物半導体プロセス技術により発光ダイオードを、また1962年には可視光の半導体レーザーの実現に世界で初めて成功した。

その後、半導体の禁制帯幅並びに格子定数を独立に制御するなど今日のオプトエレクトロニクスの道を拓き、初めて高性能な室温連続発振の量子井戸構造レーザーの開発にも成功した。以上のように、同博士は、世界を変えたオプトエレクトロニクスにおける基礎研究及びその実用化に極めて顕著な貢献をした。

「環境保全重視の農林水産科学・技術」分野

不妊虫放飼等による害虫総合防除技術の開発に関する先駆的業績



エドワード・F・ニプリング博士

米国 (1909 ~ 2000)

元米国農務省 農業研究部昆虫研究部 部長

ニプリング博士は、1931年以来、農業昆虫学者として家畜害虫の研究に精励するとともに、家畜や農作物の害虫防除に関して環境を重視した先駆的防除理論を提案し、食糧生産の安定に尽力した。特に、1931年米国西南部で猛威をふるっていたラセンウジバエ防除のために「不妊虫放飼法」を発案し、ラセンウジバエの根絶防除に画期的な成功をおさめた。

博士は、1953年以来環境と両立する害虫防除法の確立に努め、「総合防除法」を提唱し、一貫して環境に悪影響を及ぼさない害虫管理体系を目指し、国際的に理論・実践の両面において指導的な役割を果たした。

1994 受賞者

「航空宇宙技術」分野

月・惑星無人探査に対する指導的貢献と
宇宙飛行機ならびに深宇宙遠距離通信の
開発における先駆的業績



ウィリアム・ヘイワード・ピカリング博士

米国 (1910 ~ 2004)
カリフォルニア工科大学名誉教授

ピカリング博士は、カリフォルニア工科大学・ジェット推進研究所 (JPL) 所長として32年余、宇宙観測、探査手段としての宇宙飛行機及びデータ取得のための深宇宙通信網の開発に努めた。

1958年には、無線司令誘導技術によって米国最初の人工衛星エクスプローラ 1 号が誕生した。さらに1959年には、パイオニア 4 号が米国で初めて地球引力圏を脱出して人工衛星となった。博士は、惑星の画像データ取得のデジタル通信及び画像処理技術を開発し、高精密度テレビのデジタル化を完成した。

博士の業績は、「人類活動領域の宇宙への拡張」に先導的な貢献をしたが、この宇宙技術には各方面に応用され、人類の繁栄と福祉に大きな貢献をしている。

「心理学・精神医学」分野

ドパミンの神経伝達物質としての作用の発見と、
精神・運動機能とその障害における役割の解明



アーヴィド・カールソン博士

スウェーデン (1923 ~ 2018)
イエテボリ大学名誉教授

カールソン博士は、脳の神経伝達物質であるドパミンの作用を明らかにした。これはパーキンソン病の原因的治療を促した。

1988年、精神分裂病のドパミン仮説の修正仮説を発表している。これは精神分裂病を神経伝達物質の不均衡症候群として考える方向性を生み出したもので、パーキンソン病の治療方策に新しい道を拓く可能性を示したものである。

博士は、30年以上にわたり、神経精神薬理学の分野で国際的な指導者であった。博士のドパミン研究における発見は、精神分裂病とパーキンソン病の病因の理解と治療の発展に大きな貢献をした。このように、神経精神薬理学の分野から、心理学・精神医学の発展に極めて大きな業績を残した。

1993 受賞者

「安全・防災」分野

近代地震学の発展並びに
災害科学における国際活動の推進

フランク・プレス博士

米国 (1924 ~ 2020)
全米科学アカデミー 総裁

プレス博士は、長周期の表面波の解析から地殻及び上部マントルの構造が明らかにできることを提案し、数学的モデルの構築により、地殻内の地震動や地球内部の構造に関して先駆的な研究を進め、地震が断層運動そのものであることを表面波の解析により実証し、その後の震源過程の研究に先鞭をつけた。これが、近代地震学の始まりとなった。

更に博士は、国際気球観測年、世界標準地震計観測網の提案に見られるように、災害科学に国際協力の必要性を早くより認め、今世紀最後の10年を「国際防災の十年」とし、世界中から地震、洪水と渇水、火山、地すべりと山崩れ、風災害、野火などの自然災害の被害を軽減する10年にしようという国連プログラムの主推進者として活動を続けていた。

「医学における細胞・分子生物技術」分野

ポリメラーゼチェーン反応
(Polymerase Chain Reaction PCR) の開発

キャリィ・B・マリス博士

米国 (1944 ~ 2019)
アトミック・タグス社創立者・研究担当副社長

マリス博士の開発したポリメラーゼチェーン反応 (PCR) はクローニング技術にたよることなしに、直接ゲノム DNA の解析を可能にすることにより、分子遺伝学、分子生物学、医学、また、これらに関連した様々な分野に革命の変革をもたらした。遺伝病やがんの原因遺伝子の固定やこれら疾病の診断、マイコバクテリアや HIV など病因となる微生物やウイルスの迅速で高感度な検出、様々な人種の DNA 解析からヒトの起源にさかのぼる進化の系統樹の作成、絶滅した動物の化石や博物館の標本などからの DNA の塩基配列決定、犯罪捜査における証拠としての DNA の塩基配列の提供などを可能にし、その波及効果には計り知れないものがある。

1992 受賞者

「材料界面の科学と技術」分野

固体表面の化学並びに 物理の新しい発展に対する寄与



ゲルハルト・エルトゥル教授

ドイツ 1936年生まれ
マックス・プランク財団 フリッツ・ハーバー研究所 所長
ベルリン自由大学及びベルリン工科大学 教授

エルトゥル教授は、1960年代から金属表面における原子・分子の吸着現象を解明する研究を進展させ、化学吸着に伴って生じる金属結晶表面原子の再配列現象を明らかにした。

教授はまた、世界に先駆けて固体表面における化学反応を原子・分子レベルで動的にとらえる研究を展開した。その一連の優れた研究成果によって固体表面の研究に新しい潮流を拓き、材料界面の科学と技術に重要な新しい研究分野を進展させ、大きな貢献を果たした。

「生物生産の科学と技術」分野

家畜における精液及び 胚の凍結保存技術の開発



アーネスト・ジョン・
クリストファー・ポルジ教授

イギリス (1926 ~ 2006)
アニマル・バイオテクノロジー・ケンブリッジ・
リミテッド 科学・研究担当取締役

ポルジ教授は、グリセロールを添加した（培養液）保存液を加えて牛精液を -79°C の低温で凍結させる新しい精子保存法を開発した。低温生物学という農学の分野で実際に広く応用されている。ことに牛において、この技術が繁殖と遺伝的改良に及ぼした効果は計りしれない。

初期胚の凍結保存技術の発達はいまやほとんどの家畜で応用可能となっている。

1991 受賞者

「応用数学」分野

分布定数系の解析と制御の
研究、並びに応用解析学の振興

ジャックールイ・リオンス博士

フランス (1928 ~ 2001)
 コレージュ・ド・フランス 教授
 フランス国立宇宙研究センター 総裁

伝統的な解析学の遺産を活かしながら、コンピュータの駆使を前提とする応用解析学の世界的規模での確立は、リオンス博士によってはじめて成し遂げられた。

博士の研究業績は、極めて多岐にわたるが、たとえば分布定数系と呼ばれる偏微分方程式で表現される現象の制御理論は、正に博士により枠組みが確定し発展したものであり、来るべき地球環境問題での数理面において、重要な役割を果たすものと期待されている。

また、産業面に対する博士の貢献は航空宇宙産業のための計算空気力学、石油産業に関するシミュレーション、フランス電力庁に関する数学的解析がある。

「医用画像技術」分野

超音波画像医学の開発



ジョン・ジュリアン・ワイルド博士

米国 (1914 ~ 2009)
 ミネアポリス医理学研究所 所長

1949年超音波 A-mode 装置を試作し、これにより世界で初めて超音波計測法による腸管の壁の厚さの計測に成功し、人体の軟部組織の解析に超音波を使用する端緒を開いた。さらにワイルド博士は今まで全く試みられていなかった生体組織の2次元断層像を超音波 B-mode 法を用いて抽出する装置を自作し、これを使用して脳腫瘍、乳癌の診断に成功。とくに乳癌については婦人乳管内の直径7mmの小乳癌の診断に成功したことは有名である。

1990 受賞者

「総合化技術—設計・生産・制御技術」分野

人工知能という学問の確立と その基本理論の提案



マービン・ミンスキー博士

米国 (1927 ~ 2016)
マサチューセッツ工科大学 教授

1961年に「人工知能へのステップ」という論文を発表したミンスキー博士は、人工知能という学問分野を世界に広め、「人工知能の父」と呼ばれている。1970年代に入ると、人工知能が扱う対象も複雑になり、コンピュータも人間のような膨大な知識をもち、必要に応じて適切な知識を取り出して、使わねばならなくなった。知識の重要性をいち早く知った博士は、知識をコンピュータ内に表現し、利用するための枠組みとして、「フレームの理論」を提案した。1980年代に入ると、人工知能の実用化がさらに加速され、機械自身に学習させることが注目されるようになった。博士は、理論的思考だけでなく、感情や自我などを含む心 (mind) の研究が必要であるとして、「心の社会」という著書の中で、心は簡単な情報処理をする小さなコンピュータが多数集まってできていて、それが互いに連絡をとりながら動いているという心のモデルを提案した。これにより人工知能の分野が広がり、今後の発展が期待されている。

「地球科学」分野

プレートテクトニクスの創始と その発展に対する貢献 (共同受賞)



ウィリアム・
ジェイソン・
モーガン博士

米国 (1935 ~ 2023)
プリンストン大学 教授



ダン・ピーター・
マッケンジー博士

イギリス 1942年生まれ
ケンブリッジ大学 教授



ザビエル・
ルピション博士

フランス 1937年生まれ
エコール・ノルマル・
シューバリエール 教授

モーガン博士は、地球表面を約20個のプレートに分割し、それらのプレートの運動の解析を試みて、プレートの相対的運動からプレートが剛体的に地球表面に沿って回転運動していることを明らかにし、各プレートの絶対的運動を決定した。この研究により、海嶺、沈み込み帯、トランスフォーム断層等がプレートの運動によって統一的に説明されることが示され、プレートの考えの重要性が広く認識され、この考えに基づく研究が、その後飛躍的に発展するきっかけとなった。

マッケンジー博士は、環太平洋地域の地震の発震機構の解析を行い、北米大陸や東アジアに対して太平洋の海底が1枚の板として回転運動していることを明瞭に示した。また、モーガン博士とともに三つのプレートが会合する3重点の幾何学的解析を行って、その後のプレート運動の原動力の解明の研究への道を拓いた。さらに同博士は、石油や天然ガス資源の成因と重要な大規模な堆積盆地の形成が、プレートの運動により地殻が薄くなり沈降するためであるという画期的なモデルを提唱した。

ルピション博士は、地磁気の縞模様の幅から推定されるプレート拡大速度の分布とトランスフォーム断層の方向を用いて、独立にプレートの相対運動を全地球にわたり解析して海嶺での拡大に伴うプレートの運動の角速度を求め、それに基づき6つの主要プレートの相対運動を定量的に求めた。これにより、これまで観測されてきた地学現象が見事に説明された。博士は、またプレートテクトニクスの著書を著し、世界の研究者に大きな影響を与えるとともに、深海潜水艇による、海嶺や海溝などの調査でも大きな貢献をした。

1989 受賞者

「環境科学技術」分野

クロロフルオロカーボン（フロンガス）による
成層圏オゾン層破壊のメカニズムの研究

F・シャーウッド・ローランド博士

米国 （1927 ~ 2012）
カリフォルニア大学 教授

光化学を研究していたローランド博士は1974年、フロンガスによる成層圏オゾン層破壊のメカニズムを世界で初めて指摘、その理論的解明と予測を明らかにした。

すなわち、各種スプレーの噴射剤あるいは冷蔵庫やエアコンなどの冷却ガスとして広く一般に使われているフロンガスが、オゾンを分解して、地上の生物を紫外線から守る成層圏オゾン層が破壊されるおそれがある、と発表。フロンガスの放出を減らさなければ、地球の全オゾン量の減少は、最終的には7～13%にも達すると警告した。

博士の卓越した洞察力によって導かれたこの理論の正しさは、その後世界の多くの専門家によって実証され、成層圏オゾン層保護の対応において国際的、社会的に大きな影響を与えた。

「医薬科学」分野

プロスタグランジン及び
関連体の合成開拓とその医薬創製への寄与

E・J・コーリー博士

米国 1928年生まれ
ハーバード大学 教授

ハーバード大学で有機化学を研究。コーリー博士は有機合成研究に総力を注いで、プロスタグランジンの化学合成の問題に取り組み、1968年に初めて天然型光学活性体の純粋合成に成功した。合成法はさらに改良され、初めて安定的なサンプルの供給を可能にし、PG 群の解明に著しい貢献を果たした。

博士の合成法には、①効率性、②汎用性、③経済性の優れた3つの特長があり、現在、PG 群については、世界のメーカーのほとんどがコーリー合成法を採用している。

こうした博士の研究努力により、PG 群の研究は飛躍的に進展し、今日のアラキドン酸カスケード科学の確立が成され、今後、脳血栓予防剤、動脈硬化剤、抗胃腸潰瘍剤など新しい医薬創製への期待がかけられている。

1988 受賞者

「エネルギー技術」分野

高速増殖炉の 実用技術としての確立



ジョルジュ・バンドリエス博士
フランス（1920～2014）
フランス原子力庁長官付科学顧問

原子力研究の草創期から、指導者として原子炉設計の基盤確立、高速増殖炉開発計画の推進に寄与。実験炉ラブソディの建設に着手し、電気出力120万kWの世界初の大規模実験炉スーパーフェニックスを完成に導き、基本特性に関する設計の妥当性の確認により、その実用技術を確認。未来における人類のエネルギー問題の解決にも多大の功績を残した。

「予防医学」分野

エイズ原因ウイルスの発見と診断法の開発 (共同受賞)



リュック・モンタニエ博士
フランス（1932～2022）
パスツール研究所 ウイルス腫瘍学部 部長

パスツール研究所の共同研究者を率い、1983年、世界に先駆けて後天性免疫不全症候群（AIDS）の病原体であるヒト免疫不全症ウイルス（HIV）を発見、HIV 研究の糸口を開いた。さらに実用的な血清診断法を開発し、健康感染者や感染血液の確認を容易にし、基本的予防対策の確立に貢献した。



ロバート・C・ギャロ博士
米国 1937年生まれ
米国国立がん研究所 腫瘍細胞生物学部 部長

独自の研究グループを率い、ヒトT細胞培養法を確立し、HIV のウイルス分離に成功、その AIDS との関連解析に貢献。ウイルスの検出、感染経路の解明、ウイルス学的性質の解析、さらに HIV や抗体の確認などに積極的に参加し、現在最も有効な治療薬アジドチミジン（AZT）の開発研究をはじめ、ワクチンを目指した遺伝子工学によるウイルス抗原の生産においても先駆者の人物。

1988 受賞者

「予防医学」分野

天然痘の根絶（共同受賞）



ドナルド・A・ヘンダーソン博士
米国 （1928～2016）
ジョンズ・ホプキンス大学公衆衛生学部 部長

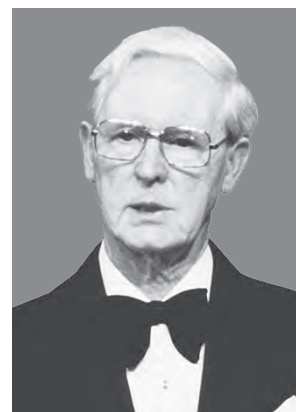
世界保健機関（WHO）の世界天然痘根絶対策本部初代本部長として、3,000年以上にわたり人類を苦しめてきた天然痘を1977年を最後に地球上から消滅させた、人類史に残る快挙の基礎確立に貢献。予防医学において必要不可欠とされる天然痘常在国の集団プログラム開発および従事者の教育・訓練にも力を注いだ。



蟻田功博士
日本 （1926～2023）
国立熊本病院 院長

WHOのアフリカ事務局、ジュネーブ本部を経て、1977年から1985年までヘンダーソン博士の後任として二代目の世界天然痘根絶対策本部長となる。

天然痘根絶対策を徹底的に実施するための基礎知識の確立に寄与し、本疾患伝播の疫学分析、自然宿主動物の調査、ワクチンの品質向上、管理に関する研究、技術を完成させ、その後の計画の遂行に貢献した。



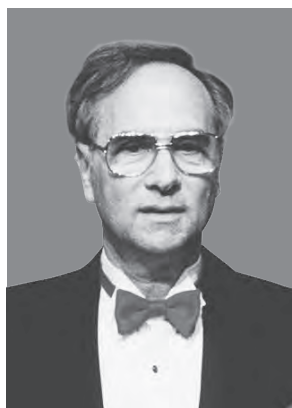
フランク・フェナー博士
オーストラリア （1914～2010）
オーストラリア国立大学 名誉教授

1978年以降、WHOの天然痘根絶確認委員会委員長としてヘンダーソン・蟻田両博士の遂行した天然痘根絶計画の評価を研究の一環として行い、計画そのものの徹底に貢献した。

1987 受賞者

「エレクトロオプティックス」分野

人類初のレーザー発振の実現



セオドア・H・メイマン博士

米国 (1927 ~ 2007)

ヒューズ・リサーチ・ラボラトリーズ 元研究主任
メイマン・アソシエーツ社長

1960年、世界で初めて、ルビーを用いたレーザー発振の実現に成功した電子光学の先駆者。この成功により以後のレーザー研究の発展は大幅に加速し、自然科学および工業技術分野の発展にも著しく貢献した。

「生物改良」分野

熱帯・亜熱帯向け稲多収穫品種 「IR 8」「IR36」等の育成 (共同受賞)



ヘンリー・M・
ビーチェル博士

米国 (1906 ~ 2006)

国際稲研究所 稲育種部 前部長
ファーム・オブ・テキサス・カンパニー顧問



グルデブ・S・クッシュ博士

インド 1935年生まれ

国際稲研究所 稲育種部 部長

国際稲研究所の創立初期から同所における稲の品種改良事業を指導。熱帯・亜熱帯における稲の育種戦略の基礎を確立。1966年に多収穫品種としては画期的な「IR 8」を造り出し、発展途上国における「緑の革命」の基礎に多大な貢献を果たした。

ビーチェル博士の後を継ぎ、「IR 8」をさらに改良し、病害・虫害・不良土壌等にも強い「IR36」を稲の遺伝資源の大規模なスクリーニングによって1976年に育成。この研究成果は熱帯・亜熱帯諸国の米の生産安定および自給達成に大きく貢献した。

1986 受賞者

「材料工学」分野

アモルファス材料などの
新素材技術への材料科学的貢献



デビッド・ターンブル博士

米国 (1915 ~ 2007)
ハーバード大学 教授

現代産業に多大のインパクトを与えているアモルファス材料など新素材開発の分野で指導原理を導き出した材料科学分野の巨星。どのような合金が溶融状態からの急冷に際してガラスと同じように原子が不規則に並ぶアモルファス状態になり易いかを理論的に予見。アモルファス材料の製造に貢献する他、高密度セラミックスや、集積回路 (IC) に使われる完全結晶などの製造への途を開いた。

「医療技術」分野

人工臓器及び
その関連技術の研究開発



ウィレム・J・コルフ博士

米国 (1911 ~ 2009)
ユタ大学 教授、医用生体工学研究所 所長

現代医学の画期的な医療技術である人工臓器の父。1943年回転ドラム型人工腎臓装置を開発し、世界発の臨床的成功を収めた。米国に移住後、ディスポーザブル型人工腎臓の開発、普及で大きな業績を残した。その他膜型人工肺、完全置換型人工心臓や補助人工心臓の開発にも主導的な役割を果たした。

1985 受賞者

「情報・通信」分野

電子通信工学に対する貢献



ジョン・R・ピアース博士

米国 (1910 ~ 2002)
スタンフォード大学客員名誉教授

通信衛星の可能性の理論的解明と実験的検証、パルス符号変調や多値符号による広帯域デジタル伝送の理論的解明、構内情報通信網 (LAN) の開発など情報・通信工学分野で数多くの画期的な業績を挙げている米国を代表する科学者。世界の情報通信技術の発展にも大きく貢献した。

「バイオテクノロジー」分野

固定化酵素の基礎理論と 実地応用面の発展に対する貢献



E・カチャルスキー・カツィール博士

イスラエル (1916 ~ 2009)
テルアビブ大学 教授、ワイズマン科学研究所 教授

バイオテクノロジーの基盤技術の一つである固定化酵素や固定化細胞を用いるバイオリクターやバイオアナライザーの発見と開発を行った歴史的先駆者。米国科学アカデミー会員に選ばれた最初のイスラエル人。1973 ~ 1978年、イスラエル共和国第4代大統領に就任。

2025年 平成記念研究助成



2025年の平成記念研究助成は下記の皆様に贈呈しました。これからも多数の皆様の応募を期待しています。

研究困難な農業遺伝資源の利用拡大でサブサハラアフリカの食卓の未来を支えるーキャッサバの多様性を明らかにするITプラットフォームー

助成金1,000万円

研究代表者	井関 洸太郎	国立研究開発法人国際農林水産業研究センター 生物資源・利用領域 主任研究員
共同研究者	ODEDEYI, Temitope RABBI, Ismail Yusuf	ロンドン大学通信接続システム研究所(英国) 研究員 国際熱帯農業研究所(ナイジェリア) キャッサバ育種ユニット長

アフリカにおけるマラリアをモデルケースとした学際的な感染症理解のフレーム構築

助成金1,000万円

研究代表者	加賀谷 渉	長崎大学熱帯医学研究所生態疫学分野 助教
共同研究者	永島 優 高 勇羅 西 真如	独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所 研究員 Department of Microbiology, Tumor and Cell Biology, Karolinska Institutet, visiting researcher/ 長崎大学熱帯医学研究所病害動物学分野 客員研究員 広島大学大学院人間社会科学研究科人間総合科学プログラム 教授

変動するグローバル秩序における中国とインド:「グローバル・サウス」をめぐるリーダーシップの競合

助成金514万円

研究代表者	高橋 知子	京都大学東南アジア地域研究研究所 助教
	周 源 KHAN, Raphaëlle ACEVEDO-OSSA, Juan	神戸大学大学院法学研究科法学政治学専攻 助手 ニューヨーク市立大学シティ・カレッジ 助教 ニューヨーク市立大学大学院センター 博士候補生

飛行型分子ロボットによるスマート農薬の開発

助成金1,000万円

研究代表者	浜田 省吾	東京科学大学情報理工学院情報工学系 テニユアトラック助教
	西田 暁史 田中 尚人 本橋 慶一	東京農業大学生命科学部分子微生物学科 助教 東京農業大学生命科学部分子微生物学科 教授 東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科 教授

2025年 平成記念研究助成選考委員会

選考委員長	選考委員
松本 洋一郎 東京大学名誉教授	岡部 繁男 東京大学大学院医学系研究科 教授 沖 大幹 東京大学大学院工学系研究科 教授 梶川 裕矢 東京大学未来ビジョン研究センター 教授 神崎 亮平 東京大学名誉教授 東京大学先端科学技術研究センター シニアリサーチフェロー
	白波瀬 佐和子 東京大学 特任教授 長谷川 眞理子 独立行政法人日本芸術文化振興会 理事長 総合研究大学院大学名誉教授 松田 譲 公益財団法人加藤記念バイオサイエンス振興財団 名誉理事

(2024 年 4 月現在、敬称略、五十音順)

当財団へのご寄付について

当財団の活動をご理解いただき、
その趣旨にご賛同いただける方々でご寄付をいただける場合には、
ご厚志に報いるべく事業活動の更なる拡充に活用させていただきます。

寄付のお申込み、ご相談、ご質問等につきましては、
事務局までご連絡をいただきますよう宜しくお願い申し上げます。

当財団は、公益財団法人の認定を受けており
「特定公益増進法人」に該当しますので、
個人または法人からのご寄付に対して税法上の各種優遇措置が
適用されます。

